

人にも見落され、大恥をかいればならぬ。

四 獨 を 慎 む

中むかし、世の亂れまして、こゝかしに盜賊おこり、在方町かたおびやかされて、一日もやすき心はござりませんだ。其頃盜人二三人、夜ふけてある家を窺ひ、月のすき間より、内をさしのぞいてみれば、としの頃四十計の女、たゞ一人。圍爐裏の前にすわり、粥を煮て居りまする様子ぢや。此外にも人やあると、なほ窺がつて居りまするうち、彼女粥のにえ加減を試る有りさまをみれば、鍋のふたをとり、清らかなる箸にて、粥少し蓋の上にはさみ上げ、指にて押潰して試み、更に口中に入れませぬ。其行儀の正しいを見て、盜大きに恐れて、にげ歸つたと、ある書物にみえました。是がこれ。獨を慎むの奇特でござります。

私どもは、とかく合點がわるうて、これは人の見ぬ處ぢや。これは人の聞かぬ所ぢや。是程の事は大事あるまい。此位な事はしれはせまいと、我ひとり合點して、道のない方へあたまた突込みこれが理窟ぢや。あれがりくつぢや。是てはどうもならぬ。あれではどうもならぬ。かうすれば勝手がよい斯せぬと勝手がわるいと、滅多に身びいき、身勝手でこじつけ、心易う渡られる世の中を、無理無體

に苦しみます。ある人の歌に、

岩根ふみからたちわけてゆく人は、やすき大路をすぎがてにする。

と朝から晩まで、岨道を横はひする不行儀な蟹仲間が多い。さりとは、こまつたものぢや。其くせ人の横はひするのは、よう、目にかゝつて、見事人の小言はいへど、おのれが横にあるくのはトント目にかゝりませぬ。又ある人の發句に、

蟹を見て、氣のつく岨の清水かな。

おもしろい句ぢやござりませぬ歎。此句を我得かたに取つて見れば、人の横はひが目にかゝつたら、チヤツトわが身にたちかへつて我もよこ這はしてぬ歎と、氣をつけてごらうじませ。此氣がつくと慎みの心がおこる。慎みの心か起れば、おのづから生つきの性をやしなう便になります。もし少しでも慎しみがぬけると、離れられぬ道を、無理無體に離れるによつて、甚苦しい。此故に朱文公も是をもつて君子は、常に敬畏を存じて、見きかずといへども、またあへてゆるかせにせず。天理の本然を存じて、しばらくの間も離れしめざるゆるんなりと、注をお下しなされました。すべて敬畏の心を存ずるは、人にむかふばかりの事ではござりませぬ。萬物に向ふに、此心をもつてむかへば

宜しうないといふことはござりませぬ。

五 農業のたとへ

我友何がし、播州三草の人でござりまするが、いたつて農業の事にくはしく、米・麥はいふに及ばず、何にても此人の手に植ゑつけますると、豊凶にかゝはらず。世間の人より作徳がたんと有つて、至極見事に出来まする。ふしぎにぞんじまして、そのゆゑを尋ねましたれば、大きに謂はれある事でござります。先稲種は、随分よい種を選んで、前年より俵に入れ、庭の天井に釣おきます。これは火氣が自然とまはつて、あたゝかなる様の心得でござります。尤も所によつては。只土藏にたくはへておく所も。ござりますれど、北國筋や、あるひは山分などでは、多く寒氣がつようござりまするゆゑ、火氣を假りて、あたゝまりを入置きます事ぢや。さて、翌年にいたり、種附時分になりますれば、かの俵をおろすに、竿のさきに鎌をゆひ付け、下よりの釣繩を切つて落し、池水に漬けます事、廿日ばかり、其のち苗代へまきつけます。これが三草邊では、すべてかやうに致します。然るにわが友何がしの心得は、大にちがひまして、稲だれといへども天地生々の氣を、ふくんでぬる活物なれば、疎略にあつかふときは、生々の氣をくじく事があらう歟と、いかにも大切につ

しんで、病人をあつかひまするやうに、しづかにかつき上げて、つりおきます。又おろすときも、階子をかけ、ソツト肩を入れて、繩をとき、静におりて、池へもち行くときも大事にして持ちゆき、又水へおろすときは、小口からソロ／＼と少しづつ、水へひたし、次第に水へおろして、つけ置ます。上げるときも、またはじめのやうにして。ソロ／＼と引上げます。是その心得は、人のあたたまより、水をかけますれば、一驚をくらひ、氣しゝまつて、暫はのびませぬ。足もとより次第に水をかけますると、胸ぶるひも出す。氣もしづまらぬ。此理を考へて、すべて種物をあつかふ事、大切の人をあつかふやうに敬畏の心をそんじて、あつかひまする故、種もの、氣がおのづからしゝまらず。さるによつて、實のり格別、世間にすぐれて出来るよし、咄されました。

成ほど有がたい心得でござります。尤も土地所により、又は寒暖によつて、さまざま種漬植ゑつけなどの仕かたもござりませうけれど、只おそれ敬しむの心を主として、其所々の法にならひ、種漬植ゑつけすべてとり入れまで、此敬畏の心で仕あげますれば、いづれ世間よりは。餘計とれればならぬ筈でござります。是は種ものに限らず。茶碗ひとつ・扇・壺本、取あつかふにも、おそれつゝしむの心があれば、とり落して割るやうな無調法は出来ませぬ。まして、主・親に向ひ、夫・兄にむかひ、此心

があらば、忠孝・貞節。おのづから勤まります。但し、畏つしむというて、ワナ／＼とふるひながら致す事ではござりませぬ。敬畏といふは、只大事大切とぞんじ詰めまする事ではござりませぬ。

六 仕來たりの家業

別して大事大切にせねばならぬは、御銘々の家業ぢや。この家業は、みな是其家々の御先祖さまや大祖父様、親御の代から仕來りの家業でござります。此家業をはじめめることは、一朝一夕のことぢやござりませぬ。鎧に血を付けたたり、鎧の袖をしきれにしたり、又は肩に棒を置いたり、あるひは草鞋を作つたり、雨にそぼぬれ、雪にうたれ、食ふものも得くはず、着物も得着ず、口をしい目も堪忍したり、難儀な事も辛抱したり、千辛萬苦して、この家業のもとを御立てなされたのぢや。その子孫として、己が勝手の氣隨にまかせて、此仕事は引きあはぬの、畑仕事はきらひぢやの、こんな小商しては、渡世になる物歟などい、かく餘所外へ、目がついて、仕來りの家業がいやになります。ソコデ、百姓が商をなし商人が醫者になり、いろ／＼にはけて世間の人をたぶらかす。恐ろしい事ではござります。ヨウおもうて御らうじませ。引きあはぬ商賣でも、埒のあかぬ細工でも、見事先祖代々、世波が出来てきたのぢや。それが今更渡世にならぬといふは、皆これ、家業に精が出ぬ

のでござります。是を怠ると申します。此怠りの起る所は身の分限を辨へませぬによつてぢや。分とは士・農・工・商それ／＼の分ち、限とは町人は是だけ、百姓はこれだけ、職人はこれだけ。みな夫それに、住居・衣類・食物は申すにおよはず、身分だけの限りがござります。是を分限と申すのぢや。その分限を過す所から物入がつようなり、入目が多いに付けては、金まうけが足らぬやうになります。ソコデ家業のこしがぬけて、おのづから精出して勤めることがならぬ故、トリ／＼先祖から仕來りの家業を取替るやうになります。こはい事ぢや。めい／＼身にたち反つて、慎しまねばなりません。たま／＼據ない事で、家業をかへる人は、まことに止む事を得ぬので、ござります。夫を手本にして、めつたに商賣をかへたがる人は、鴉、鴉の眞似をして水をのむ、と申すものでござります。

七 本尊のとりかへ

こいによい譬の話がある。さる貧地の和尚様が、急に賽錢をしてやらうと考へ、有りきたりの本尊、あみだ如來は古めかしく、世間に類も多い。當時世間をうか／＼に専ら子たうむ事がはやる時節なれば、子安の觀音を本尊として、安産の守りを出したらば、寺門の繁昌うたがひなしと、

俄にのみだを、觀音にしかへ、門前には本尊子安の觀世音と、墨ぐるに書きしるし、看板をかけたれば、參詣の人。肝をつぶし、あやしんで門内へはいりませぬ。和尚大きに氣をいらつて、これではいかぬと、又々工夫し、其翌日は辨才天、あるひは金ひら、弘法大師と、おもひ出すまい。とり替へ引きかへ、日々本尊を仕かへましたれば、後には猫の子も來ぬやうに成つたと申す事ぢや。商賣がへをしたがる人は、此和尚さまのお仲間うちぢや。先祖開山上人の御苦勞なされた家業如來を大切に御守をして御先祖開山より傳來の家藏・諸道具・鍋かまの御寶物を大切に守護して、一向一心に。家業如來を信心さへいたしますれば、參けいは門前に市をなし、賽錢は、米・麥・錢かれ、雨のふるやうに、元日から、大晦日まで、上り通してござりまするに、この和尚さまのやうに、本尊を仕かへ、御開山の御苦勞をかへり見ず、不信心になるがさいご、參詣は日々にへり、賽錢は月々に減じ仕かたがないゆゑ、寶物をうり喰にする、本堂たちまち大破におよびます。其のとき一家親るゝへ奉加帳を持つてまはつても、誰が一人寄進についてくれる者はない。是がこれ寺や本尊は、おれが物ぢやとおもふ、和尚の心得ちがいで、寶物を賣らねばならぬやうに成りまするのぢや。是を孟子も、家必ず自らやぶつて、而して後、人これを毀ると仰せられました。とかく家業に忘つては

なりませぬ。ある人の道歌に、

おこたりも夏のかせぎもほどく、ほにあらはれて見ゆる秋の田。

六月炎天に田をぶつくとにえ返つてある中へ、四つばひに成つて、腰ぎりはいり、脊はこらんで灸點おろさや分らぬやうに、眞黒に日にやけ、汗しづくになつて、一番草、二ばんぐさ、三番草と、ねんごろに手入した田も、またぶしやうかはいて、晝めしの箸はなすと永の日を、七つ時分まで晝寝して、のら／＼と明しくらし、一ばん草もろく／＼に取らぬ田も、青田のときは同じやうに見えますれど、秋になると、はいものぢや。手入をした田は、實がいつて皆俯いてゐる。又のらかはいた田はきよるりが、みそれぶつたやうに、ひよろ／＼と。立つてゐます。

人の怠りも此通りで、平生は、格別おごつた様にも、あそんだやうにもおぼえませぬ。昨日はこれほど怠つた。けふは是ほど油斷が有つたと、その折々はわかりもいたしませぬども、十二月の大晦日には、書出しはつんで山のごとく、胸づかへして、飯も喉へ逆りませぬ。ひろげて見れば、皆それ／＼に覺のある事。此のとき手を持つて胸を打ても、モリおそひ。是みな平生の油斷からぢや。とかくおこたらぬやうに、いたさればなりませぬ。かんざしは大事歟。花見は大事歟。此くらゐな事はし

ても大事ないとゆるす心の果ぞかなしきぢや。所詮分限を辨へて、立反へらにや成りませぬ、かるがゆるに、中庸に、君子その位に素して行ふ。其外を願はずと、お示しなされたので、ござります。

八 道具屋のはなし

これについて、おもしろいはなしがある。さる茶人の家へ、道具屋が参りまして、モシ旦那この道具を御らうじませと、さし出せば、旦那が手に取つて、ホンニ此茶わんは時代が見える。書付はない歟。誰が手づくれぢや。ハイこれは武藏坊辨慶が、手づくれの茶わんでござります。いかさま其時代と見える。代金は何程ぢや。ハイ、三貫匁でござります。ヨシ、これは貰うておかふ。時にこの蓋置は、またよほど、時代がみえる。鼎足でもなし、また三人形でもなし。ハイこれは、むかし鴻門の會の節、樊噲が楯の板をはさんで、門をやぶりました時の鏡のかな物でござります。それはけしからの時代ものぢや。これも序に買つておかう。時に此香合は、大分あたらしく見えるが、これは誰が作ぢや。ハイ、これは加藤清正、朝鮮征伐のとき、朝鮮王城の土をとつて、手づくれになされた香合でござります。それは一段おもしろい。これもついでに、買つておけ。いづれ近々茶を出さればならぬ。先辨慶の茶わん、樊噲の蓋置、清正の香合、よい取合せぢや。しかしみな、兵ぞ

ろへぢや。是はどうした事ぢやと、問はれたれば、茶道具屋がぬからぬ顔で、つよい答でござります。たんと家をふみつぶして来た道具ぢやといはれた。ナント恐ろしい話でござりませぬ歟。茶碗や香合ばかりの事ぢやない。小間物やが持つてくる仕入箱の中にも、朝比奈や辨慶が、本名をかくして櫛笄屋になつてゐようもじませぬ、うるたへると、身代を兵共になしきつぶされます。其外古道具、古手見世。質屋の蔵に、つんであるしろものは、皆身代をふみ潰した兵。どこに埋伏して居ようもしれぬ、御油断は成りませぬ。とかく大事大切の慎みがぬけると。大騒動のもとぢや。御用心なされませ。休息

續々 鳩翁道話 貳の下

一 省察の工夫

隠れたるより見はるはなく、微より顯なるはなし。かるがゆるに、君子はその獨を慎しむ。前には敬畏のこゝろを存じて、天命の性をやしなふの工夫を御しめしなされ、こゝには今一段くはしうして、省察の工夫を御しめしなされたのでござります。省とは常にこの心の存するや、否やと

省み、察は善歎、悪歎と、あきらかに辨へて、天命の性を全うすることをござります。まづ本文に、
 隠たるより見はるゝはなしとは、人の心の事を申すのでござります。又微より顯なるはなしとは、
 念慮の微なる事をいふのでござります。さて獨とは、われひとり知るところの場所にて、すなはち念
 慮のうごくところを、さして申すのぢや。大勢の人の中でも、わがこゝろの中は誰もしらぬものゆゑ
 さればこそひとりとは申すすれ、すべて。至善も、極悪も、この我ひとり知るところの場で、極めま
 するのぢや。多くは、これ世間の人の不忠不孝におち入りまするも、またいにしへ夏の築王、殷の紂王
 などの天下を亂し、其身を亡しまするも、はじめ僅に此ひとり知る念慮の微なる所より起るのでござ
 ります。たとへば、螢ほどなる烟草の火より大火事となるやうなものぢや。さるに依つて、省察の工
 夫をこらし、つゝしみを加へれば成りませぬ、此獨をつゝしむ事。僅な事のやうにござりますれど、其
 しろしが天地、位し、萬物やしなはるゝに至りまする。又この獨しるところを、うかくと油断して
 おきますると、其しろしが國を亡ぼし家をやぶり、身をうしなふにいたるのぢや。ナント恐ろしいも
 のではござりませぬ歎。古語に、念慮萌されば、鬼神も知る事なしというて、此一念の萌さぬ
 ちは、鬼神もはかり知る事が出来ませぬ。なぜなれば知るべき事がないによつてござります。

二 念慮についでし警諭

むかし飛彈の山中に、檜木の長へぎをこしらへ、世渡とする男がござりました。一日例のごとく、
 山に入りて、細工をする折から、前なる杉の木の下に脊の高い山伏が、おもひがけなう、立つて居ま
 した。かの細工人大きにあやしみ、さても此山伏は、天狗さうなと思ふうち、かの山伏大聲あげて、
 我を天狗さうなとおもひなるぞといふ。細工人いよゝあやしみ、これはいやな事ぢや。早く逃歸ら
 んとおもへば、かの山伏また聲をかけ、これはいやな事ぢや。早くにけ歸らんとおもひなるぞといふ
 細工人、あわて騒いで長へぎをたはめ、急に荷ごしらへするとき、手がはづれて、枋板一まい、はづ
 みに飛んで、かの山伏の鼻柱へきびしくあたれば、山伏一驚をくらひ、さてゝおのれは氣のし
 れぬ男かなといふかと思へば、かき消すやうに失せたと、ある書物に見えまする。

是かの天狗も、人の念慮のおこる所は、忽に、知りますれど、念慮の起らぬさまに、長枋のはじけ
 ることは、夢にもしらぬ。これ、知るべき道理がないに依つてぢや。さるによつて、一念おこると、
 天地神明に通じ、世界中へ、つゝぬけに成りまする。こゝを以て朱文公も、己ひとり知るときは、則
 ちこれ天下の事。著見明顯なること、しかもこれに過ぎたるもの有ることなしと、注をお下しなさ

れました。さるに依つて常に腹のうちの吟味して用心をいたしませぬと、どんな大事をひき出し、悪名を流さるやうにせぬ。甚おそろしい事でございます。

三 手代の悪念

先年わたくし江戸表に居りましたる節、隣家の事でございますが、ある呉服店の手代に、獨を慎しむ心得のない人がござりまして、いつの間にか、貳拾兩ばかり、引負が出来ました。されども、まだ季節まではあらはれぬことゆゑ、とやかうと工面して居るうち、一日金貳百兩の爲替手がたを持つて、麹町邊までうけ取に往かれました。先方で恙なう此金を受取りました所で、ふと悪念が起りました。恐いものぢや。其故は、いづれ節季になると、貳拾兩の引負があらはれて、請人へ預けられるは必定、所詮この金の手に入つたこそ幸なれ。此ま、かけ落ちて、京・大阪へなりとも出掛け、ともかくもならうと、無分別を考出した。これが是物をかくせば、隠されるものぢやと、心得ちがひする人の所作ぢや。大切なものは、金銀、おそろしいものは、人の心ぢや。指一本はじく間に、どのやうな無分別がおこらうやらしれませぬ。若いお衆は別して戦々競々、こはし〜のおつしみが、肝要でございます。さて此手代がわるがしこ工夫をして、此ま、逃なば、追手のかゝ

る事は必定、いづれ二三日、江戸の町にかゝみぬて、其のうちに上方へのぼらうと、覺悟をきはめ、日ざしを見れば、まだ晝前、何處でなりと、日を暮さうとおもひまして、よし町というて、堺町の裏新道に、怨意の茶屋がござりました。先こへ逃込んで、さてどうも仕様はなし。たいこ持やら燈籠鬘やら、高なしに大勢呼びよせ、酒・肴と、どんちやんとて、日をくらさうと。ぞんじましたか、能うした物ぢや。本心が合點しならぬ。酒はなんぼ飲ても酔はず。太鼓・三味線も面白からず。太鼓もちのかる口も、胸にこたえて、さり逆はこゝろぐるしく、首をのばして日ざしを見れば、まだ八つ前、いつものはみじかう覺る日もけふに限つて、格別に長うおぼえ、どうぞして日を暮したいものぢやと、さし俯いて思索してゐる。ナントこれが鼻たれの時分から、おせわに成つた御主人の恩を知た人でござりませう歎。恩をしらぬものを人面獸心というて、面は人でも、こゝろは獸ぢやというてあれど、畜生にも此やうな不義な心はござりませぬ。

四 犬のたとへ

わが友何がしといふ人、町分にて年寄役を勤めておられました。然るにこの町分に、何處から来たとも知らず、迷ひ犬が一疋居りましたが、いつしか町中の飼犬のやうに成つて、こゝかしこでやし

なはれて居りました。されば、此犬が近頃往來の人をおどし。子供に噛付き、あるひは非人などに
 かみつきました。折々町内へ、附きたへにあづかり、迷惑すること度々ござりました。あるとき町
 用につき、隣町へかの年寄相談にゆかれ、夜ふけて歸る處を、件の犬が、さんくにおどしまし
 た。やうく我家へ逃こみ、寢て見ても、腹が立つてられず。翌朝會所へ髪を結に参られました
 折ふしかの犬が、其會所の庭に、寢て居ます。ソコテ年寄が、にはかに氣色をかへ、犬にむかひ
 て人にいふ如く、おのれ町内のやしなひをうけ命をつなぐ。恩義もおもはず。や、もすれば、往來
 の人をそなひ、町中へ迷惑を掛けるのみ歟、夜前町用にて夜ふけて隣町より歸る節、何ゆゑ町役
 人をおどしたるぞ。これによつて已來町分にさしおくこと罷ならぬ。いづれへなりとも立ちされと、
 犬に叱りましたれば、かの犬、首をたれ、つくばひ居ていかにもあやまり入りたる體はみえました。
 さすがに年月、町内に居りました犬ゆる、不便の心おこり、已來をきつとたしなみなば、これ迄の
 とほり、町分にさし置いてやらうと詞を和らげましたれば、かの犬うれし氣に表へ出ました。髪結
 はじめ、家内の人、この様子を見て、大にあきれ、お年寄は氣が違ふたる歟と、怪みましたと申す事
 ぢや。扱ふしぎなは、件の犬が、その日より、往來の人をおどさず。其うへ、かの年より、他へまゐ

られまする節は、かならず町さかひまで送り、また歸る節は、町さかひまで出むかひまして、先にたつ
 て門口に蹠まります。畜生といへども、恩をしらぬといはれては能々に恥づるところありと見え
 まして、かやうに所作がかはります。
 これでおもへば、主・親の恩をしらぬものは、人面獸心とは、中々いはれぬ。畜生にもはるかに
 劣つたる所作でござります。是全く、平生、獨なつしむの心がない故、人の見ぬところ、人のきか
 ぬ所と、わがてにゆるして、不忠・不孝の所作になります。人は萬物の靈と申して、一切いきとし
 けるもの、中において、尤もすぐれたるが人ぢや。それに不忠・不孝の名を取りまするは、實にはづか
 しい、口惜い事でござります。しかも不忠不孝の名をとつてせめて、立身出世でも出来ることか、
 氣隨・氣まゝがなる事歟。鳶・鴉でも遊んでゐてはくはれぬ。鼠もいたちも。分相應にかせがれば、
 口すぎは出来ぬ。若いときの無分別には主・親の手をはなれたれば、格別自由が出来るもの、やうに
 覺えるは、これが血氣のムチヤクチヤ思案。乞食・非人になつても、あそんでゐてはくはれず。とて
 も動きはたらくものなら、主親のお膝もとで、忠・孝がつとめたい物ぢや。うるたへると本心が眞黒
 に成つて、いつのまにやら獸にも劣る心になります。古歌に、

生茂るむぐらの宿の道たえて、人もかよはず月もてらさず。
 此歌のこころは、仁義の良心をうしなうて、人の道に離れては、生きてゐる死人ぢやと、たとへて
 よんだ歌と聞えます。筒様なお人は、澤山にあるものではないけれども、得て一人や二人は、あるもの
 でござります。御用心をなされませ。

五 手代芝居を見て悔悟す

扱、かの手代どのが俯いてゐるを、氣のとくがり、ソロソロたいこもちが、おだてかけて、ナント
 これから、芝居へ御出なされませぬ歎、といへば、大勢の燈籠びんが、わたしらもお供いたしませう
 と、とりぐにすゝめる。ソコでかの手代が思案に、まだ日は暮れず。酒飲んでも酔はず。太鼓・三味
 線もうるさく、たゞ何となく、しめつけらるゝやうにおもふ最中なれば、イツソ芝居見にいたらば。
 まぎれることも有らう歎、是から、大勢うちつれて、芝居見にゆく。ナニか、錢はらはぬ芝居行な
 れば、めつたに廣う樓敷をとらせ、大勢の燈籠びんをまへにならべ、其身は頬かぶりて顔をかくし、
 後の方にちこまつて、もとより芝居見る氣でもなし、どうなとして、日を暮らさうと思ふゆゑ、見
 るでもなし、又見ぬでもなし、たゞツツ〜として俯いてゐる。

此日の狂言が、敵討つれの錦といふ狂言で、伊兵衛・佐兵衛といふ若黨がたがひに女房を
 賣つて、金の才覚し、主人にやらうといふ趣向ぢや。尤伊兵衛の女房は、佐兵衛が妹で、器量
 がよくて、銀五百五十匁に身をうり、また佐兵衛の女房は、伊兵衛がもうとで、不器量ゆゑ、
 錢一貫文で身を賣る愁歎のところを、かの手代が聞けば、伊兵衛の詞に「一貫の、錢のあたひ
 は十二匁、世間通用の秤でかけたら十二匁あるべきが、今日、この世界を照さつしやる天道の秤では
 此見よが五百五十匁の身の代も、お縫が其一貫の十二匁も、ちつともかるみはあるまいぞ」と
 いふ聲が耳に入ると、かの手代がなにおもふたか、しく〜と泣出したが、たまりかねて、何ともい
 はず。其座をたつて、一さんに主人の家へかけて戻りました。これ本心の發見、地獄のかまのふた
 の明きとき。ある人の發句に。

一しぐれ時雨れてもとの月夜かな。

ナント、おもしろい發句ぢやござりませぬか。若いときの不了簡は、たとへば晴たる空の、俄にかき
 曇つたやうなもので、善悪もわからず主・親の事もわすれ果て、まよひにまよつてつきあつた所で
 はじめて目のさめるは一しぐれしぐれて、もとの月夜かなぢや。人の性は善なり。一旦明德は昏ん

だれど、今芝居を見て、畢竟、狂言綺語とはいひながら、勸善懲惡のをしへにちがひなければ、此手代どのが、見るとも見ぬともなしに、狂言の趣向が、身にしみんときたへ、能々おもうて見れば、かれはわづかな切米をもらふた主人の恩義に、女房を賣つて金の調達して、恩をおくらうとおもふものさへあるに、我は幼少から格別の大恩をうけて、人に成つたことをうちわすれ、大切な主人の金を引負し、その上大金までぬすみ取つて、出奔せうとおもうたは、われながら不思議なほど、恐ろしい了簡ぢやと、フト氣がついて見れば、座にもたまらず。叱られることも、引負のことも、何もかも思はれず、只そのまゝに、主人の家へ歸つたのでござります。實にありがたい目のさめ様ぢや。これは是狂言のおかげぢや。すべて芝居。淨るり、皆善をすゝめ、悪を懲らす、手短かなをしへてござりますれど、得てはうまい處の身を喰はずに、味ない皮ばかりを給る人があるものぢや。狂言が上手ぢやの、男つきが立派なのと、やくにたいぬ所ばかり、見て戻るは、かへつて毒にこそなれ、をしへにはならぬ。

さる所に、いたつて實體な息子どのが有つて、芝居などは、見た事もない篤實なうまれ付。ソコテ謡講の連中が、かの實體ものを、放蕩仲間へ引入れやうと、一日無理無體に、芝居へつれて行き

ました。かの息子どの、はじめから終まで一つ／＼感心し、落涙して、よろこばれた。友だち衆が、此體を見て、さては芝居が氣に入たとみえると、その後度々さそへども、ふたゝび芝居へは往かぬ。ソコテ友達衆が、合點がゆかず、かの息子殿に、此間はしきりに感心して、面白がつたぢやない歎。全體何を感心せられたのぢやと問はれましたれば、かのむすことのがいはるゝには、ナンボリ渡世に精出すというても、六月炎天に、わた入を三つ四つ、さされて、飛んだりはねたりの所作ごと、中々我が一日をろばんはじく様な、勤ではない。いかさまあれほど渡世に精出されば、身代はもたれぬものぢやと、それで感心いたしました。さるによつて、ふたゝび芝居へ往つたら、此方の身代がもてぬによつて、得参らぬといはれたと申す事ぢや。これらは、是芝居の。うまい身の所をたべたと申すものぢや。どなたも芝居を御らうじるなら、かやうなところを、御覽なさるがよい。

むかし柳下惠といふ賢者は、水飴を製して、根機をやしない、學問のたすけとせられた。又盜匠といふ大盜人は、みづ飴を製して戸櫃にぬり、盜のたすけとしたと申す事ぢや。同じ水あめでも、ちぬやうに依て、學問のたすけとも成り、又ぬすみのたすけともなる。怖い物ぢや。芝居・淨るりも此通りで見様によつては忠・孝のをしへとなり、又見やうによつては不忠・不孝の手ともなる。幸に、

この手代衆の、よいところまで、氣のついたは、いまだ天道にも捨られぬ處があつたとみえる。有がた
い事ではござりませぬ歟。

六 道を行ふ秘傳

是ぢやによつて、専ら獨をついしむの、修行をせねば成りませぬ。慎しむとは、一念のきさす時、
良知の鏡をてらして、善歟、悪歟を明らかにわきまへ、悪なればこれをやめにし、善なれば固くこ
れを執りまするを、慎しむとは申します。このつゝしみが、癖付になつたを、聖賢・君子と申すのぢ
や。何分常に、わが腹の中を吟味して、少しも恥かしくない様にしておくが、學問の肝要でござりま
す。此ひとりをついしむと申すことは、道を行ふの極秘傳、かへすくありがたい聖賢のお示してご
ざります。たとへば、蟻にかまれたるとき、其疵口をそいですつれば、たちまちに治るやうなもの
で、一念きさして悪としつたら、チヤツトやめにすると、總身へ毒はまはらぬ。これを捨て、おくと
其悪が、段々、腹の中で大きくなり、潛滋暗長というて、目にはたゞねど、いつの間にか心の悪
が形にあらはれ、やめにしたうても、相人が出来て、やめられぬやうに成ります。吸がらの火は、ふみ
けしても、仕廻るけれど、火事に成つてからは、水も階子もとゞかぬ。只一念機微の間に、善・悪をえ
らんで、悪をやめにするが、道の奥儀でござります。ドゥソどなたも、こゝをお勤めなされて下され
ませ。

七 手代の改心

さて、かの手代どの、主人の家には、今朝から爲替を取りにやつたが、晝になつても戻らず。先方へ
問合せにやれば、先刻手代どのへ、金子をわたしたとの事、サアこれから大騒ぎになり、請人を呼び
にやるやら、卜者に見てもらうやら、上を下へとませかへすところへ、七つ時分に、かの手代どのが
何氣ない體で、もどつて来た。此の家の番頭どのが、いたつて發明なうまれ付ゆる、彼手代の戻ると
き、其顔付をみれば、只ならぬ顔色、足もとを見れば、かたしくの雪駄をはいてゐる。しかもかた
しは、絹眞田の緒の付た女雪駄。さては此奴、餘ほどうるたへたものと見える。何さま子細あらん
と、しづかに金子を問へば、別條なく、二百兩もち歸つて、番頭へわたします。ソコで、番頭がい
はるゝには、歸りの遅う成つた子細も、尋ねたけれど、何歟つかれたやうすにも見える。まづ二階へ
上つて、一寢入れよといはれた。かの手代も、これをしほに、にいへ上つて跡はともあれ、先金子
を主人へわたしたれば、安堵して、氣をしつめました。此番頭の叱らぬはたらき、甚感心な事でご

ざります。

さて、その夜しづかにぎんみする處、引負の金子二十兩。有體に打あけ、なほまた、今日の不所存のこらず咄し、其うへ伊兵衛・佐兵衛の狂言で、氣がつき、恥をしのんで歸つたる様子、委細に咄しました上、いか様とおはからひ下されいと、實に誤り入つた體でござりました。

これによつて番頭どのが、主人へ委細に申したれば、主人も分別ある人にて、芝居狂言を見て、本心にたちもどりの出来るは、まだたしかなる所がある。兩ふつて地かたまると、此後急度あらたむるならば、今一度つかうてやれといはる。是からかの手代どのが、眞實主人の恩が有りがたう成つて、奉公を大切につとめ、難なく宿ばいりをしられたと申すことを、承はりました。

誠に、あやうい事でござりまする。是で能う御合點なされませ。主・親ほど、世の中に目の長い慈悲ぶかいものはない。あまり結構すぎるによつて、さまざまの、小言が起る。畢竟、腹一ばい物をたべて、ひだるい目をしらぬからぢや。ある人の發句に、

その腹に、何が不足ぞなく蛙。是は、奉公人衆の事ばかりぢやない。所帶を持つたれきくの旦那面白句ぢやござりませぬ歟。是は、奉公人衆の事ばかりぢやない。所帶を持つたれきくの旦那

さまざま、皆入川のごとでござりまする。猶あとは明晩おはなし申ませう。下座

續々 鳩翁道話 參の上

一 中和、性と情

喜怒・哀樂のいまだ發せざる、これを中といふ。發して皆節にあたる。これを和といふ。中は天下の大本なり。和は天下の達道なり。

これ則ち人の性と情との徳をいうて、道はしばらくも離れられぬと申す事をお示しなされたのでござりまする。畢竟、性と情と。わけてはいへど。心の事ぢや。たとへば、性と情とは。水と波とのやうなもので、はなれたものではござりませぬ。風が來て、波のおこるときは、情の發したやうなものぢや。風止んで水しづかなるときは、性のやうなものぢや。波の外に水もなく、水のほかに波はない。人の性・情も、これと同じ事で、所詮、動・靜の二つで、其實は一づでござりまする。この性・情をわけて、心と申します。心の體は性なり。心の用は情なり。心は道なり。さればこそ、性は道の體、情は道の用なりとも申してある。これで見れば、人と道とは、離れたうても、はなれられるものではござりませぬ。

さて、此性を知らうと思はば、喜びもせず、腹たてもせず。かなしみもせず、樂しみもせず、可愛がりもせず、惡みもせず、又ほしがりもせず、此七情の發らぬ先は、只何ともない物ぢや。此何ともない所を、性と申して、かたよりもせず、ゆがみもせぬ故、此徳を中と名づけます。此場所を見附たる性をしつた人と申すのでござります。しかも見るといふて、何も見るといふものはござりませぬ。しかれども、何もない性に一切の理がふくんであつて、能萬事に應じます。かるがゆゑに、中とはあたるの義とも、申してござります。則ちこれが、天命の性。道の大本といふてあるのぢや。さて情をしらうとおもはば、何ぞ喜び歎、腹たてる歎、事のあるとき、主・親は申すに及ばず、世間の人がこれを聞いて、かれが喜ぶは尤もぢや。腹たてるい道理ぢやと、得心して下さるのは、則ち情の正しいのでござります。この徳を名づけて、和と申すのぢや。和はやはらぎむつまじい事て、人がみな合點してくれる故、和は天下の達道とも申してある。則ち情の正しいのは、世間へ通用して指支へがないによつて、達道と申すのでござります。この味を、朱文公がおたとへなされて、ちやうど家のうち人が居て、西へゆくのもなし、東へ行くのでもない。何ともない所が性のやうなものぢや。さて東へゆくべきときは、東へゆきて、西へゆかず。南へ行くべきときは南へゆきて、北へゆかぬが、情

の正しいやうなものぢやと。仰せられましたさて簡様に、性ぢやの、情ぢやの、心ぢやの、體ぢやの、用ぢやの、人心ぢやの、道心ぢやのと、申しならべて見ますると、女中がたや子供衆は、さだめて、御合點もまぬるまい。また人の腹の中に棚がいくつも釣てあつて、それ／＼の品物が積てある様にも聞えませう。けつしてさやうではござりませぬ。畢竟何ともない物に、さまざまの名を付けたのでござります。されば、此道理は、しひて知らいども、大事ござりませぬ。只今日しれた通を、お勤めなされると、此理にかなひますものぢや。

二 明徳の玉を磨さし話

こゝにふい譬の話がござります。さるかに學問ずきの人がある毎日先生の方へかよはれましたが、ある日何歎、店とき物をしてゐる。折ふし宿坊の和尚さまが通りかゝつて、これは何をしでござるぞ。ハイ／＼とき物をいたしてをります。それは何をおとぎなさるのぢや。されば此の先生に明徳の玉をさづかりましたが、先生の申されますは、これは是大切な玉ぢや。すていおくと、くもりがかる。折々切瑳琢磨というて、ときみがきをさつしやれと。申されました。去によつてただ今明徳の玉をといひ居りますものぢやと。いはれた。ソコで和尚が、それは結構なものぢやかれ

聞いた明德の玉歟。ドレ拜見いたさう。見せさつしやれと手にとつて、つくづく見て、イヤ／＼御亭主、これは明德の玉ではござらぬ。我方でいふ。面向不背の玉といふものぢや。さても、貴公は、仕合な人ぢや。随分この玉を、しん／＼さつしやれ。中々明德の玉とは天地の違ひぢやといはれました。亭主は合點せず。イヤ／＼それでもこれは、明德の玉にちがひはござりませぬと、せり合うてゐるところへ神主殿が來かゝつて、これは店さきで何を争ふのぢや、ハイ私が明德の玉を磨いてゐますればこの和尙がそれはちがふ。面向不背の玉ぢやといはれますゆゑ、せり合うてゐます。神主どのが、聞いて、ドレ／＼おれが見きはめて進ぜう。見せさつしやれ。ハ、ア、みな違うた。これは明德の玉でもなし、また面向不背の玉でもない、といへば、二人が口をそろへて、ソナナ何の玉でござります。サレバ／＼、この玉は我方にいふまが玉といふ物ぢや。中々貴さまがたのいふ玉とはちがひますといへば、和尙がはら立て、ドレ見せさつしやれ。ヤツパリ面向不背の玉ぢや。亭主氣をいらつて、其玉をひつたくり、イヤ／＼明德の玉にちがひはない。神主も目に角たて、かの玉を又引たくり、ヤツパリまが玉に相違は無いと、たがひにせり合ひ、あつちへひつたくり、こつちへ取り、争ふうちに、取おとして玉はみぢんに碎けたれば、たゞ世界ばかりで、有つたと申す事ぢや。ナント味のあるおもしろい

話では、ござりませぬ歟。チトかんがへて御らうじませ性ぢやの、情ぢや、の心ぢやのと、さまさまの名は付いてあれど、其名を取つてみれば、たゞ世界ばかり、何にもない。ある人の發句に、
踏くたく氷の下に水もなし。

箇様に申しますると、それは無の見に落るのぢやと。思召うが、落ちたうても、おちられるものではござりませぬ。何ちやしらぬが、春になると花がさき、秋になれば紅葉する。柳は緑、はなは紅、分別するほど、邪魔になる。柿の木に柿が出来る。桃の木には桃が出来る。鷹飛んで天にいたり、魚は淵にたどりまゐります。此うまい無造作な味をしらさうと。聖賢・君子が齒をくひしはつて、お示しなさる、けれど、きよろりとして居るには、こまつた物ぢや。なかに分別が有つて、東へ行くべきときに東へゆかずして、西へ行きたがり、南へ行くべきときに南へゆかず、とかく北へ行きたがる。これが天命の性にさらひ、情がれぢや、情がれぢや、正しう發せぬ。ソコテ明けてもくれても、せつない苦しいと、顔をしかめて、泣きあるくものがある。尤もかやうな人は日本にありはいたしませぬ。唐・天竺には、まゝこれに似た人があるものぢやめつたに油斷は成りませぬ。

三 心學の效

心學の有がたい事は、名目をはなれて、たゞ何ともない、我なしのうまい所を見付けまして、是にさからはぬやうにいたしまするゆゑ、分別せずして、おのづから樂になります。名を付けて申しますれば、性にしたがふ道が勤まるのぢや。さるによつて、無學文盲でも、隨分修行が出来ます。よし又修行はせいでも、氣質のよいお人は稽古せずして、人の道をおつとめなさる。畢竟銘々どもは、氣質がわるいによつて、獨をつゝしむの稽古をいたされば、なりません。全體は稽古せいでも、どうせいでも、忠・孝はつとまるやうに、うまれ付いてあるのぢや。かるがゆゑに、孟子も人の性は善なりと仰せられた。善なれば道に背かゞ苦はない。されども、氣質の善・惡によつて、修行をせねばなりません。此事は前夜申したことでござります。幸ひに稽古なしに人の道をつとめた人がある。序にはなし申ませう。

四 周防の關藏兄弟の事

周防國、吉城郡、岩淵村と申しまするは、則ち長崎街道、小郡驛と宮市驛との間に。壘道村といふ間の驛がござります。此驛より、岩淵村へは八町ばかりござりまして、すなはち街道筋にて。長門の國。萩の御領分でござります。此岩淵村に關藏といふ百姓がござりました。女房もあり。高七

石ばかりの作りをいたされました。しかるに、此關藏病身にて、はかしく耕作も出来ませぬ。へに、わづかの作徳なれば、下作にあてますることならず。もとより夫婦の中に子はござりませぬ。兄弟も大勢ござりましたけれど、ことごとく死うせて、只今末の弟に、伊八と申す者たゞ一人残りしました。これによつて此伊八を、順養子にして、高七石を譲り、關藏夫婦は隠居同前になり、近村より嫁をもらひ受け、伊八に娶合せ、農業を致させました。

五 嫁お石の眞實

此嫁の名を、お石と申しまして、年十七歳にて伊八が妻と成りました。此人後に孝貞の名、關西にきこえまして、太守様より褒美頂戴いたされた人でござります。

古人の語に、人生れて、婦人の身となる事なけれ。百年の苦樂他人にまかすと。いかさま、女は一たび夫の家へ嫁入すれば、身終るまで、夫にしたがふが道ぢや。さるによつて、其夫の心得次第で、かの氏なうて玉の輿にもり、さはなくとも、衣裳に花をかざり、下女・下男多くめしつかふやうにならうやら、またその夫の心得によつては、嫁入のとき、長刀をふらせて来た人も、貧苦かんなんにせまつて、身にはつれなまとい、味噌こしを提あるかうやら、百年の樂しみも苦しきも唯亭主の心

得次第でござります。幸ひに、皆さまは、お仕合がようて、結構なお暮しをなさるゝは、ひとへに夫の御恩でござります。得てわゆるうすると、この道理もしらず、こちらは貧乏人の娘ではなし、よめ入して難儀する筈はないと想うてござる人が、あるものぢや。是はきつい御了簡ちがひぢや。百貫目の身代も、萬貫目の身代も、亭主の了簡ちが、ひとつくひ違ふと。たちまちちんからりて、飯たかにやならぬ様になります。是ぢやによつて、随分御亭主様を大事におかけなされませ。

扱かのお石は、嫁入してより後、舅・姑によくつかへまして、眞實の親のやうに介抱をいたされます。それのみならず、常に夫伊八にしたがうて、農業のたすけをなし、其實體なる事、近所の人の目を驚かす程の事でござります。しかるに、かの伊八といふは生得心さまのよからぬうへ、兄の家督を繼いでのち、お石を娶りてより、いよく身持よろしからず、第一に農業をきらひ、高七石の作りな、女房一人にうち仕せ置いて、その身は小商にかゝり、のみ酒屋をしては、人に賣るよりは己がさきへ飲上げてしまひ、古手屋をしては博奕の算用に取りられ、菓子屋をしては損をし、豆腐屋でも損をし、其くせ短氣な生れ付で、かり初にも喧嘩、口論、人のむすめに疵付けては、ぐずりあるき、尤も驛ぢいといとるなれば、常に驛場になち入り、たゞのらくとして、明けてもくられても、女房はかり

責せたげて、猿つかふ様に追廻し、日々に困窮にせまる。誠に氣毒千萬な悪黨ものでござります。これに依つて、居村は申すにおよばず。隣村、近村身ぶるひたて、疫病神の様におぢおそれ、實にもてあまして居ます。されども、お石は少しも恨みず。一言も口答へせず、千辛萬苦して、舅・姑のはいはうと高七石の農業と、亭主のわる遺ひの尻ぬぐひに、日をおくること、およそ六ヶ年ばかり、ナントめづらしい有りがたい女中ではござりませぬか。

六 不出來の内儀の揃ひ

是に付いてをかしい話でござります。去る所の下女が、香の物鉢をとりおとして割ましたれば、内儀が大聲をあげて、おりん、何をわつたのぢや。ハイかうのもの鉢を取りおとしまして、大きに不調法でござりました。ナンヂヤ鉢をわつた。其鉢が、おまへの二年や三れんの給銀で買へるものか。先度も大事の茶碗をわつて、又けふも鉢をわつてぢや。ソウ片端からわつて貰うては、こちらの身代は半季もついかぬとわめくを聞いて、御亭主が、コレ〜どうした物ぢや。そなたはとかく、仰山なものいひやうする。世間體もある。チトたしなまじやれ。すべて女といふものは、何事もやさがたに小さう取りなしていふものぢや。おれが此間江戸から歸りがけに、原の驛でとまつて、朝立しなに、草鞋をは

きながら、テモ富士山は大きなものぢやといふたれば、宿屋の下女がいふには、イエー、あのやうに、大きい見えましても、半分雪でござりますといふた。兎かく女子は、かうやさしう云ひたいものぢや。そちがやうに、かりそめにも、仰山に物いふと、女子らしうなうて、聞えがわるい。已來チトたしなましやれど、叱りましたれば、内儀が頼ふくらして、其くらぬな事、わたしぢやとて、知てぬますと、せり合うてゐる處へ、惡意の人が見えて、これは八兵衛さん、此間江戸からお歸と承はりましたが、先御機嫌よくて、おめでたうござります。定めて長の道中、おつかれも有らうとぞんじましたに、お見うけ申せば、能う肥えてお歸りなされたと、挨拶するのを、内儀が横合から出しやばつてイエー、あの様に、ヨウこえて、見えますのは、半分は折でござりますといはれた。ナント出來のわるい内儀ではござりませぬ歎。得てわろうするとい、コンナ女中があるものぢや。我身の恥になる事もしらずに、亭主のわる口を、近所合壁へいひまはる。鹿島のことふれ、山の神の御謔宣には、こまり入つたものでござります。おたがひに腹の中をさがして見て、亭主のわる口をふれ歩行きはせぬ歎。かしこがつて出しやばりはせぬ歎。頼べたをふくらして居はせぬ歎と、吟味するが肝要でござります。

扱かのお石の親里は、相應に暮して居りますれば、これまで度々舞の伊八へ、金子も川立てやりましたれど、淵へ鹽を投込むやうにて、何ほど入れ足しても、やくにたはず。其のうへ娘が、艱難辛苦するを見て、親の心には、いかにも堪られず。お石を呼にやり、二親が異見して、幸に子もなし、縁を切つて歸れと申しますれど、よく心得たる女にて、全く夫伊八の身持のわるいは、私のつかへやうの、能うないのでござります。いづれから申しても、麻につる蓬とやらで、一方が直なれば、おのづからまつ直になられば成りませぬ。伊八どの、心得違の、直りませぬは、ヤツパリ、私のわるいのでござります。其上伊八どのとはあれ、舅・姑御は、この上もない、けつこうな二親ぢや。伊八どのがわるいと申して、ふり捨てて歸られるものござりませぬ。唯此まゝに捨おかれて下さりませと。其志いたつて正しうござりますれば、里の親たちも、せん方なくて、このまゝ捨置いたら、後には困窮にせまり、縁切て歸ることもあらうと、これより後は、一向におとづれもせず、又無心もきかず、ひとへに困窮に迫るを、待ておられましたと申す事ぢや。

詩にいはいく、桃の天々たる、其葉素々たり。この子こゝにとつぐ。其家人によるしと、見えまして、こゝにとつぐというてあるは、嫁入する事でござります。朱文公も、此註に、婦人、嫁を謂ひて、

歸といふとござりまして、よめ入して夫の家へゆくのではござりませぬ。歸るのでござりおす。およそ女子は、一たび嫁しては、夫の家を家として、外に歸るべき家はない。されば此石女が、親里へかへるまいといふは、歸るべき家がないによつてぢや。しかも此人學問をして、この道理をわきまへ、歸るまいといふのではござりませぬ。發して節にあたる、情の正しい處で、則ち天下の達道でござります。誰が聞ても尤もと存じまして、一言も點をうつ事は成りませぬ。其根元は、天命の性に率ひ、本心の指圖通にしてござる故に、無筆文盲でも、かやうの働が出来ます。こゝを以て見れば、あながち學問をせればならぬといふ計の事ではない。唯本心にしたがへば。自から性情の徳があらはれ忠臣、孝子にもなれます。

すべて父母のゆるしをうけて、夫の家にいたり、それから後に、さまざまの苦勞をするも、又結構な身になるも、皆天命ぢや。しかれば、難儀に窮にせまるといふても、天命の難儀、困窮なれば、遁れんとすれども遁るべき道はござりませぬ、よし無理にのがれて、親里へ歸つても、同じ天地の間なれば、色しなかにへて、また難儀困窮する。これが自然の道理でござります。百人に壹人は、夫を見すて、おや里へ歸り、また外へよめ入して、結構な身になる人もないではない。されども、此人、

身は結構になつても、心はかならず苦勞する事があるものぢや。夫にしたがうて道をまもれば、形は苦勞すれども心は安樂な。また道をそむいて、身は結構になつても、心の苦勞はたえぬ。よいした物ぢや。

七 伊八の出奔

さてかの伊八は。次第に困窮の身と成りましたゆゑ、一足とびのかね儲けんと、無分別をおこしまして、銀主をこしらへ、多くのほうろくをやかせ、船積にして、下の關へおくり、利徳を得んと、やがて自分上乗をして、のり出しましたが、天のゆるさぬ所でござりました歟。海上にて難風に出合ひ船は岩にあたつて碎け、ほうろくは微塵になり、その身も海中におちりましたが、どうやらかうやら命たすかり、今一人の船頭も是もふしぎに危きながれて、兩人ともにたすけ船にうち乗り、陸にあがりまして。伊八は今さら在所へ歸る事もならず。終に其まゝいづくともなく、逐電いたしました。かの船頭在所へ歸つて、この事を物がりましたれば、關藏夫婦、お石のかなしみ、申すまでもござりませぬ。しかるに在所中は伊八が逐電を聞いて、かへつてよるこび、疫病神をおくり出したやうに、皆々安堵いたしたと申すこととござります。この伊八が行状は、天命の性にさからひ、なす

所の所作一つとして、悪事ならぬ事は、ござりませぬ。これその情の乖戾するとして、れぢれまし
 たのぢや。去によつて、人みなこれを忌悪み、五尺の身のおき所のないやうに成りました。これぢや
 によつて、戒愼・恐悞し、獨をつゝしむの修行をいたして、どうぞお互に、人の道をはなれぬ様
 心が肝要でござります。休息

續々 鳩翁道話 參の下

一 天人一致、萬物一體

中和を致して、天地位し、萬物育はると、これ則ち戒愼・恐悞、ひとりをつゝしむの功によつて、
 小人も聖人の域にいたり、其徳大地と合して、萬物も生育す。所謂、天人一致、萬物一體の理を、お
 しめしなされたのでござります。畢竟、中とは天命の性ないひ、和とは性にしたがふの道ないふ。
 致とは、修行して推極るのぢや。平たういへば、本心の通りにして、少しも背かぬ事でござりま
 す。大きいふと國・天下もなさまり、小さいいへば、一家・一路もなさまる。有りがたいことぢや。
 天地位すとは、聖人國を治めたまふ時は、雨風時にしたがひ、天は、天の徳をあらはし、地は、地の

また一家でいへば、親は親のやうになり、夫は夫のやうになるのぢや。萬物やしなはるゝとは、五風
 十雨ときにしたがへば、人は申すにおよばず、米も麥もよう出来、鳥・獸も其所を得て、おのれが生
 を遂げます。一家で申さば、家内の諸道具、鍋・釜まで、質屋の藏へもはいらす、道具屋の店へも
 出ず、おのゝ其所を得て、その役をつとめます。これがこれ、その本心にしたがふ歟、率がはぬ歟、
 この二ツのさかひで、天地位し、萬物やしなはるゝと、親子・兄弟、はなれなくゝになるとの、二ツに成り
 ます。ナントこはいものではござりませぬ歟。その本は暗ざる所をいましめ愼み、聞かざる所を恐懼れ、
 わるい分別はおこりはせぬ歟と、腹のうちを、吟味する、獨をつゝしむ工夫の出来、不出来によりま
 する。この道理を合點して、おこたりなう、勤めるが、學問の極功。聖人の能事も、この外にある
 のではござりませぬ。どうぞ本心におしたかひなされ、精出してお勤めなされませ。ある人の歌に、
 あすもまた朝とく起てつとめばや、窓にうれしき有明の月。

わが心學の得方にとつて見ますれば、味のある面白い歌でござります。チト考へてござらうませ。
 さてかのお石が親里には、折もあらば、むすめを取りかへさうと考へて居ました所に、幸このたび伊八
 が逡電したと聞付けましたゆゑ、よい縁の切り所と早速に娘をよびよせ、速かに離縁してもどつて來

い。もし此度も縁をきらず、親の詞に背かば、餘儀なう勘當せればならぬと、おどしかけて責めますれば、お石は、興のさめたる顔にて、御勘當はかなしけれども、夫伊八の行くへしれませれば、誰にとわつて縁を切つて、歸りませうぞ。何事も私の不運、今更里へかへりましては、舅・姑御の介抱は、何人が致しまするぞ。これからが、嫁の入用、身を粉にくだいてなりとも、夫伊八と二人まへの孝行は、私がせねばなりません。お詞をそむきまするは、不孝なれども、此儀は御ゆるされて下さりませと、中々承知するけしきもなく、これより終に親里と手切れになりました。此とし、お石廿二歳。ナントめづらしい有りがたい女中ではござりませぬ。

人の親のこゝろは闇にあられども、子をおもふ道にまよつて、世間にはこれに似た無法な事をいうて、娘に縁をきらす親達があるものござります。子もまたうるたへて親のことばにつき義理も法もうち忘れて、縁をきつてもどる上に、猶へら口をたいて、親の詞を背かぬが、子たる者の孝行ぢやなぞ、利口にいうて居る人がある。氣毒なものぢや。孝經には父に争ふ子あるときは、則ち身不義に陥らず。かるがゆゑに、不義にあつては、子もつて父に争はずんばあるべからずと見えます。今お石が父母に争ひ、勘氣をうけても、伊八と縁を切りませぬが、則ち父母を不義におとし入れぬ

と、申のござります。しかも、お石が孝經をよみ習うた人でもなく又學者でもござりませぬ。しかれども、其本心の正しきを守るときは發して節にあたる。天下の達道、これが中和をいたすと、申すものでござります。

二 お石の行狀

これよりお石は、手ひとつにて舅・姑につかへ、専ら農業を勉めます。しかるに天性、顔かたち見ぐるしからず。ことに年も若ければ、居村は申すに及ばず、隣村の悪少年ども、其獨身なるを見おなどり、とかくいひよるものも多くござります。お石もとより、鐵石の志にて、髪に油をもちぬす。衣類は膝を過ぎず。然もまた行儀正しく、人にあつて甚慇懃にござりますれば、これに恥ぢて後々はいひよる者もなく、却つてその行狀の正しいを、譽る様になりました。成るほど行儀は大事のものでござります。たとへば、奇麗に掃除して、水うつて、チヤント掃ちぎつてある處へは、塵芥を捨てに来る人はない。皆此方の仕向ぢや。せけんに埒もない事の出来るのは、みなムシヤグシヤと、行儀がたゝぬによつて、さまざまの塵芥を持ちつける。こはいものぢや。御用心なされませ。ある人のうたに、

汲みてしれこゝろのその井をふかみ、すむもにこるも我ならぬかは。さて、その翌年の年貢を滞なくなさいました。翌年にいたり、勇關藏かりそめの煩より、つひに腰ぬけとなりました。かばかりのわづらひゆる、薬代は勿論諸入用も多く成りますれば、しうとめに介抱をたのみ置いて、其身はいよく、辛苦して、農業をつとみました。何さま世の中に不仕合な人も多けれど、中にもお石は格別に不仕合にて、其翌年また姑も同じく腰ぬけと成りました。是によつて高七石の作りも出来ぬやうに成りますゆる、村役人へゆきて、委細をはなし、御大切の御田地なれば、若未進等も出来ましては、申し譯がござりませぬ。何卒お預り下されいと、段々とたのみましたゆる、村役人も尤もにぞんじまして、やがて下作へ預けてくれました。お石はこれより僅なる作間をもらひ、晝夜兩親の介抱にかゝりまして、物半日と出あるくことは出来ませぬ。やうやう半道一里の使をつとめ、又は臺道村へ出まして、少しづつ、の小揚にやとばれ、家にあるときは兩親を左右へれさせて、其身はまん中におて、草履わらぢなつくり、世わたりの助に致しますれど、女の手業といひ、殊によこれ物のすゝぎせんたく、介抱に手がひけまする故、はかしくしきはたらきも出来ませぬ。さるによつて、次第に困窮にせまり、朝夕のたべものさへ、漸く兩親へ粥をすゝめしまする

位のとゆゑ、其身はたべるふりして給ぬ日も、をり／＼はござりましたと申す事ぢや。されども猶不自由なる體は見せず。かいく／＼しく介抱する事、すべて十一年の間、其こゝろさしいよく、かたく少しも弱りたるけしきはみえませぬ。まことに有りがたい女中でござります。子のたまはく、歳寒うして、而して後、松柏の凋むに後る、事をしると、論語に見えまして、君子も、小人も、事のない時は別に替つた様子はみえませぬと、困窮にせまる歎。事の變に出合ふたときは、小人の悲しさには、利欲にまなごくらむゆる、手あしをはつてうるたへまする。君子の所作は、かやうのときにあつては、いよく静にして、少しも騒ぐことはござりませぬ。たとへば、冬に成つて、木がらしのふく時分には、草も木も色かはり、葉もおちて、其姿ともみえませぬ。然れども、其中に松や柏は、なほみどりの色を失ひませぬ。これと同じことで、お石が此とし頃の行狀實に此場所てござります。さてある日、お石くれ方より、人足に雇はれましたが、心いそがはしく、道をせいたれども、餘儀なき用事にて少し隙どり、其夜四ツ時分に歸りました。いつも門口より聲をかけますれば、内よりも返事する。しかるに今夜に限りて、返事もなし。これはいかにと、内に入つて見れば、兩親はさめ／＼

と泣いてござる。扱は何ぞお氣にいらぬ事が有つた歟。私の歸りがおそい故に、お案じてござりましたか。と、しきりに問へば、兩親の泣く／＼いはる／＼には、我等夫婦いかなる宿業にや、伊八の不所存ゆゑ困窮にせまり、其上二人とも業病に取りあひ、此とし月をなた一人の介抱で、今日までは命をつないだが、今よひそなたの歸りのおそいゆゑ、もしや我々夫婦をすて、親里へ歸つた歟と、ふと疑の心が起るにつけ、よく／＼思へば、此年ごろの艱難辛苦、中々眞實のむすめでも、是ほどに介抱はとゞきはすまい。されども、永の年月の事なれば、退屈の心のおこるのも、無理ではない。去りながら其方が歸つてくれれば、あすより我等夫婦は乞食もならず。立どころに餓ゑて死ぬると思へば、たゞ何となく物がなしく成つて、おもはずも泣きました。能う戻つて来てくれたと、又うれしなきにさめ／＼と泣かれました。お石は、きの毒さ、いかばかりなけれど、わざと打ちわらひ、今夜は餘儀なき用事にて、すこし道で隙どりしましたのぢや。たとひ此後いかほど歸が遅いとしても、必ず心よわい事をおぼしめすな。我が身は死んでも、こゝろは死なぬ。いつまでも御介抱申して、御先途を見とつけます。くれ／＼も心づよう思しめせと。とかくいひなぐさめて、くすりなどあたため、例のごとく兩親の眞中にて、はなししながら、草鞋をつくる。程なく夜も更がたに成りましたれば、とくやすめと

兩親のいは、故、うすき裕やうのもの引きかづきて、其まゝそこに寝いりました。ある人の發句に、

我が身に秋かせ寒し、親二人。

ナント哀れな句ではござりませぬか。チトかみ／＼めて御らうじませ。扱關藏夫婦は、宵のつかれに一ト寝いりれ入りましたが、ふと目をさましてみれば、お石がしく／＼と聲もたてず、しめ泣きに泣いてゐる故、大に驚き、何故ぞと問へば、寝ても見ても、目があひませぬといふ。それは何ゆゑぞと類にとへば、されば伊八どの家を出られてより、すでに六年、里の親たちよりは縁を切つて歸れかしと度々申されますれども、もとより歸るべき志はござりませぬ。そののみならず。御大病の後、なほさら側を離れてはならぬと、心一ぱい御介抱申しますれど、折々の雇はれ仕事に手がひけて、十分に御介抱のとゞきませぬは、まだ私の盡さぬ所があるによつて、親里へ歸つたかと、お疑ひもおこります。これ全く私のとゞかぬのでござります。どうしたら御安心に成りませうと思へば、寝ても寝入られませぬと、いひわけする詞のうち、少しも舅・姑を恨みまする心もなく、たゞわが身の足らはぬを歎きます。眞實がみえますれば、關藏夫婦も大に氣の毒に思ひ、とやかくといひなぐさめ、其夜はやう／＼やすみました。

實に此一條一點も父母をうらむ心なく、たゞおのれが身をなくやみするは、實に有りがたい志こころざし。わが身に立ちかへつたものでござります。孟子まうしに所謂行ひ得えざることあれば、皆かへつて是を、おのれにもとむと、見えましたるも、これらの事ことで、ござりませう歟。

されば、此翌日よくじつより雇はれ仕事を、かたくことわり、只兩親りやうしんの側そばをはなれず、近隣きんりんの人をたのんでわづかなる賃仕事ちんじしよを請けとり、其日の烟けむりをたてます。其艱難かんなん困窮こんきやう筆ふでにも詞ことばにもつくされる事ではござりませぬ。あるとき、隣となりの人が来て、關藏せんのざうへ申しけるには、此のころ隣村となりむらへ、京都御本山きやうとより御使僧しそうが御下向ごげかうなされて、ありがたい御勸化ごくわんげがある。トウツならう事なら、參詣さんげいをさつしやらの歟とすゝめました。關藏せんのざうはうちうなづいて、いかさま伊八いぱちが居りました時分じぶんは、隱居いんきよ同前どうぜんの事ゆゑ、なり〜は御法座ごほふざへも出ましたが、今は不自由ふじゆうなからだに成つては、それさへおもふ様になりませぬといふを、お石いしが聞いて、左様の思し召しめならば、とくにもお供ともいたしませうといふ。關藏せんのざうも大おほによるこび、さうば御法談ごほふだんを、久しぶりちゆうもんで聽聞ちやうもんしませうと、その用意よういにおよびました。則ち御法談ごほふだんのある隣村となりむらへはおよそ道一里みちあまり。しかるをお石いしは、かの舅關藏しゆうとを脊せなにおひ、姑しゆうとめにしばらく留守るすをたのみ、

やがてお迎むかひにまゐりますると、帶おびやうのものにて、小兒せうにを背おひたる如く舅しゆうとをおひ、一里あまりの所を女の身みにて、かひがひしくも通かよひます。尤其なほの道みちには川もあり、橋はしもあり、とかくして寺へゆきつき、講中かうちゆうをたのみ、かの舅しゆうとをおろし、堂だうの隅すみに寒さむからぬやうにこしらへおきて、是よりまた引返ひきかへして、家に歸り、姑しゆうとめを脊せなに負おひ、隣へ留守るすを頼たのみ置いて、ふたゝび寺へたち歸り、講中かうちゆうへあつく禮れいをのべ、舅・姑の二便にべんの世話せわなどし、其身かたはらは側そばにあつて、なでさすりしながら、御法儀ごほふぎを聽聞ちやうもんする。さて、法話ほふわをすれば、講中かうちゆうへ姑をたのみ置おきて、まづ舅しゆうとをはじめの如くに負おうて、道をいそぎて、家に歸り、舅しゆうとをおろしてれさせおき、また寺へ姑をむかひに来て、脊せなに負おひて、講中かうちゆうに禮れいをのべ、一いさんに家に歸る。すべて一座いちざの法話ほふわを聽聞ちやうもんするに、舅・姑を背おひて、一里餘あまの道を往來わうらい都合つがひ六むたびにおよぶ。しかも一日の事ではござりませぬ。法座ほふざ日限にちげんの間あひだ、雨の日も風の日も、一日も怠なげることなき孝順かうじゆんの行狀ぎやうじやう、見る人驚歎きやうたんせぬものはござりませぬ。されば、後々さんげいは參詣さんげいの人、お石いしが至孝しかうの志こころを憐あはれみまして、多くは姑を背おうて、お石いしが勞らうをたすくる人もござりましたと承うけたまはりまする。

三 お石賞を受く

なほまた人の耳を、おどろかしましたるは、かの法座ほふざを勤つとめられし僧、お石いしが日々に奇特きどくの參詣さんげいを

感じ、講頭植田何某といふ人に、くはしくその由来をたづねまして、名所を書しるし、法座をはつて後、歸京いたされ、此のよし御本山の御聞きに達しましたる所、御感稱のあまり、お石へ結構の御菓子一折、關藏夫婦へ法名を下しおかれ、これを捧持して、翌年また、かの地へ御使僧御下向に相成り、法座はじまりし所、例のごとお石、舅姑を負うて參詣に及びましたる故、やがて御命のおもむき申しさかせ、右下されもの頂戴仰せつけられましたるは、實にありがたき仕合、これひとへに至孝・貞節の徳と、隣國まで傳へ聞いてうらやまぬ人はないと承りました。

されば、これらの始末、終に太守様の御聞きに達し、やがて御近臣柳井何がしといふ士に、仰せ付けられ、かの地へたち越え、とくと相糺し來たるやうとの御命が下りました。さるによつて、柳井氏、即刻小郡驛へ、發行せられまする道中すぢ、驛々にて繼立の人足にかならずお石が事をたづね問はれますれば、皆こたへて、たい、一ト口に奇妙な人ぢやと申します。いかさま遠國邊鄙のこゝろなきあらくれたる人足衆も、此お石が行狀を、見聞きしては、わるいとはさすがに思はず、然れども、何と譽めてよいやら、譽めやうがないによつて、只奇妙な人ぢやと申しまするは、尤もの事でございます。實に、又金玉の詞をつられて譽めたりとも、萬が一にもおよびませぬ。所詮、言句におよぶところて

はござりませぬ。人足衆の口々に奇妙な人ぢやと申しまするは、實に的當の譽めやうでございます。さて柳井氏、小郡驛にいたり、植田何某を召して、委細にたづねられしところ、聞きしにまさる行狀なれば、早速立ちかへつて此段言上に及びますれば、太守様、ことの外感じ思召され、關藏夫婦へは生涯二人扶持を下しおかれ、猶また、お石は萩の御城下へめしよせられ、御目見仰せ付けられ、御懇命を蒙むられしは、實に冥加至極の事ども、身をたて、道をおこなひ、名を後世に揚げて、もつて父母をあらはすとは、これらの事てござりませう歎。

さて、こゝに奇特なる事は、岩淵村の人は、申すにおよばず、近村こそつて、はじめ疫病神のごとくおぢ恐れ、毛むしの如くに、いやがった伊八を、この兩三年前より、そろ／＼其ゆくへを尋ねるやうに成りましたと申す事ぢや。其故は、お石一人が身心を砕いて舅姑につかへまする行狀を見るに付けては、せめて、伊八が、家にあつて少しは手助けをする物ならば、さぞかしお石もよろこぶであらうと思ふ心より、人々いひ合されども、小郡驛へ人足に出づる度毎に、必ず往來の人について伊八が人相、骨柄をはなして、かやうの人をば見あたり給はぬ歎。など、あてなしに尋ねましたる所、ふしぎに長崎にゐるといふ事を聞き出し、やがて村中の人申し合せ、一兩人伊八をむかひに、

長崎へ参りました。これ全く、お石が孝貞、人をして感ぜしむる所より、忌きひらし者を、はるく迎ひに参るやうになります。さりとては、孝行の徳は、廣大なものでござります。

扱長崎へいたり、難なく伊八にめぐり逢ひまして、在所へ歸れと申しますれば、伊八中々聞きいれず。所詮かれ儲ければ、在所へは歸られぬといふ。かの迎ひに來りし人、委細にお石の孝行節義を咄しまして、借錢はともあれ、速に在所へ歸つて、お石が志を助けよと、申しますれば、伊八これを聞いて大に驚き、まだお石は居りまする歟といふ。居りまする所ではない。その孝順の有様、見て居られぬ故、貴様を迎ひに來たのぢやと、無理に引たて、在所へ歸へりましたる所、在所中、大騒ぎの最中。何事ぞと問へば、只今萩の御屋形より、お石が御褒美を頂戴して戻つた所ぢやといふ。

四 伊八の悔悟

さしもの伊八、これを聞いて、腸をあらふごとく、懺悔、後悔して、これより本心にたち返つて、よい人になられたと申すことぢや。是ひとへに、お石の孝徳、他に及んで、此奇特があるのござります、徳孤ならず、必ず隣りの聖語、今さらおもひあたつて、驚くばかりの事とござります。さすれば、此事隣國、遠境に聞えまして、小郡驛御通行の御歴々さまがた、御本陣へお石をめさ

れて、御目見仰せ付られ、御銀おびたしく下し給はる事、度たびと承はりました。中にも奇特に覺えましたるは、小野何がしといふ人、お石がことを傳へ聞いて、十四歳になる娘をつれて、はるく岩淵村に尋ねきたり、お石に對面におよばれしとき、かのむすめのよまれたる歌とて、
立よりてしばしなりともならはばや、おやにつかふる人の心を。

ナントやさしい志ではござりませぬ歟。習うてよいものは、忠臣・孝子の心、習はないでも大事なのが、髪のかざりや、衣裳の端手ぢや。

五 性にしたがふ道

すべて、お石が此十一ヶ年の行狀、よそから習うて來たのではない。性にしたがふの道を盡したのでござります。此性、お石にばかりあるものではない。お互に具はつてある、生れつき心のぢや。さるによつて、今にもあれ、志を起して勤めるときは、誰しも出來ぬ人はござりませぬ。忠・孝の出來ぬといふのは、出來ぬのではない。せぬのぢや。

子曰はく、仁、遠からんや。吾仁を欲つすれば、仁に仁いたると。仁は善の總名、心の全徳、物を愛する理。孝行・忠義は直に仁ぢや。仁其まゝ人の性ぢや。性、則ちうまれつきの心といふ事ぢや。

されば孝行、忠義を勤めようと思ふと何ときでも勤まるのぢや。此結構な本心を持ちながらうろくとして一生を終るは、口をしいことではござりませぬ歟。

之について、よう似た話がある。山家から始めて京へ、奉公に出た下女が、夜になれば行燈をと

すといふ事をしらず、内儀のさし圖で、暮がたに行燈に火はともしたが、只手にさげて、うろくくと、

臺所や座敷を持ちまはつてゐる。内儀が見つけて、ナセ臺所におかぬのぢやと叱たれば、下女ぬから

ぬ顔で、もし闇がりに置いてても大事ござりませぬかと、言うた。ナント味のある話じやない歟。

どうぞ一たび本心の明りを見知つておいて、自由自在に、くらがりな照す様にいたしたいものでござります。

朱文公觀書の詩に。

半畝方塘一鏡開。

問渠那得清如許。

チト御かんがへなされませ。

續々鳩翁道話 終

齊家論 卷の上

齊家論 序

子曰く予欲無言、天何言哉。四時行はれ百物生る、天何をか言ふ哉。聖人さへかく宣ふ。況んや余の如き淺淺ふさげ言句を吐くこそをかしけれ。不肖のものは四十にたらず死なむこそめやすかるべけれど、徒然草にせしられしが、死なぬ命は是非もなし。門弟より養ひを受け、腹ふくらして、れてもぬられず。腹すかしのため、同志の人の家齊ふる便りともならんかと、いやしき儉約ごとを書き散すは、すきに赤糸ほしといふものか。

延享甲子のとし、五月上旬、石田勘平自序

一 心學講述の始

實に年月の過ぐる事早きは、たけき川水の流るゝがごとく、止る事なし。予、講釋を初めんと志し、何月何日より開講。無縁のかたぐいにも、遠慮なくきかるべしと、書付を出せしも、はや十五年

に成りぬ。

其頃書付を見て、殊勝なりといふ人もあり。又あの不學にて何を説くやと譏るもあり。或は面々は譽むれども、影にて笑ふ人もあり。其外評判まち／＼なりしと聞く。予晩學の事なれば、何を覺えし事もなく、行跡も好き人に似ることあらば、しかるべきに、それもいよく及びがたし。然るに何を教ふと思ふべきか。吾をしへを立つる志は、數年心をつくし、聖賢の意味、彷彿と得る者に似たる所あり。此心を知らしむる時は、生死は言ふに及ばず。名聞・利欲もはなれやすき事あり。是を導かん爲なり。尤文學に拙なき講釋なれば、聽衆もすくなからん。若聞く人なくば、辻立してなりとも、我志を述べんと思へり。

二 梅巖の立志

ねがふ所は、一人成りとも五倫の交りを知り、君に事ふる者ならば、己を忘れ身をゆたれ、苦勞をかへりみず、勤むべき事を先とし、得る事を後にするの忠をつくす人出で、又父母に事るに、親しく愛しまぬらせ、常／＼よるこべる顔色あつて、身のとりまはしは、柳の風になびくごとく、睦しくつかふるの孝をつくす人出來らば、これ生涯の樂。たとひたとひ、千萬人に笑れ、恥をうくとも、いとふ

ことなき志なり。

三 友人の忠告

其比實義あつて、へつらひなき朋友の有りが、某にいはるゝは、汝は、我に比すれば學者なり。然れども、推出し儒者とはいはれまじ。又世間に沙汰なき人にも、出會て見れば、經書はいふに及ばず、詩作・文章・達者なる能き學者あり。又儒者ならねども、少し心がけある人には、汝ぐらゐの學者は町並にも有るべし。其中にて、無縁の講釋すると、口廣き事はいはれまじ。夫をもかまはず、書付を出されなば、聽く者もあるべけれど、一度聞いては、素讀同前の講釋なりといひ、又口の悪き者は、あの學問にて講釋するは、笑ふにたらず、譏るべし。たとひ十日・廿日、入りかはり聽衆ありとも、つゞくまじ。其時に至りしまはんよりは、今七八年も學問し出られなば、本望もとげ、恥を受くる事も少からんと、いはれし人も過去り、むかしがたりになりぬ。

或人のいへるごとく、予不學なれば、四書・五經にさへ、假名して讀み來れり。しかるに、幸なるかな。今日まで入替り聽衆もたえず。其中に親しき門弟もあり。今々の門弟には、文學を好める人もあれど、したしき門弟は、文質彬彬は所詮及びがたしと思ふより、某言ふ所に同心し、且、他をも誘ひ

集むる事こそ殊勝なれ。

四 武藏の孝子、越後の孝婦

寛保元年秋の比、門弟のもの來りて云ふ。武藏國に、薪木賣、長五郎といふ孝心なる者あり。江戸表は、これ沙汰にて、則ち其趣き板行にあらはれしとて、見せられけり。曰はく、武藏國、多摩郡、府中領、押立村に、長五郎といふ小百姓あり。其身貧しく、妻にもはなれ、八十八歳になる母を養ひ、其外子供にもせがまれながら、母を大切にやしなひ、孝をつくせしゆゑ、公の御惠にもあづかりしとなり。此長五郎貧き百姓薪賣の事なれば、學問の徳にて孝行したりとも見えざれども、天下萬民聞き知る程にはなれり。門弟中には、是までは、文學なくては、學問の甲斐なきなどと、おもひし者も、長五郎が事を聞き、いよく吾言ふところに同心するこそ有りがたき。

又去ぬる年、門弟一書を持來り見せらばけり。題號は、越後孝婦傳とあり。曰く、越後國、三島郡、出雲崎、尼瀬の大工作大夫が女房は、姑に孝行なるものなり。夫作大夫も、孝心なるものなれど、世のいなみのやるせなくて、他國がせぎに出づるゆゑ、女房ひとり、七十にあまる姑を介抱し、孝行をなし、是も御惠にあづかりしよし、板行にあらはれ、普く天下にひろまるは、有りがたきにあらずや。元來假

名ものなれば、講釋するに及ばざれども、京・大阪・大和・河内にて講釋の上にて讀聞かせたり。其意は、かく孝行すれば、天下に知られ好き事と思ひ、名聞に成るとも、孝行がさせたく思ふ所なり。天子より已下、庶人に至るまで、孝終始なきときは、患ひ及ばざる者はいまだこれあらじ。又地の利に因り身を謹み、用を節して、以て父母をやしなふは、諸人の孝と、孝經に説きたまへり。

五 儉約、その結果

それゆゑ、常に儉約の事を説きさせ、門弟へは月次の會に、折々儉約の題を出し、得心あるやとこころみれども、是までは志も立たざりしが、五六年より十四五年も從へるしるしにや。去秋町家の門弟志を起し、來りて曰く、我れく年来教を受くといへども、家を治むる上に、心得たがひあり。今般家を治むるは、儉約が本となる事を得心せり。其本立つときは、奢りもやみ、家も齊ふべし。家齊ふれば、おのづから親の心を養ふ孝行となり、其出入の者も、心安く惠まるべき理あり。他の奢り筋にて、當分親の心をなくさむる事も有るべけれど、約を守らざれば、段々内證に不足立ち、諸事のまはりあしくなりて、借金せば、つひには親の心をくるしむるに至るべし。尤是までも、内證の事は、約を守る志あれば、つとめ來りし事もあれど、衣類などは、表向の物にて、世間なみの事なれば、心付なく、う

かしくとくらせし所、能く考ふれば、分に過ぎたる衣裳を是非に着よと言ふものは、なき事なり。其外儉約筋諸事。親しき門弟示し合せ、急度あらため、家内にて行ふべしといはれけり。殷の紂王始め象の箸を爲りし時、箕子懺歎して、彼象の箸を爲り給は、必ず玉の杯を爲るべし。玉の杯を爲らば、必遠方珍怪の物を思ひて、これを用ゐ、輿馬・宮室の漸、此より始る。すくふべからずといへり。君子の眼、違はずして、遂にすくはれずして亡びたり。天下の主として象の箸はわづかなれど、高山も微塵よりなるごとく、終には民を暴虐し、殷の天下を亡ぼすに至る。高・下ありといへども、家を興し、家を亡ぼす理は一なり。奢は日に長じやすし。恐れ慎むべき事なり。子曰く禮は其の奢らんよりは、寧ろ儉せよと。又約を以て是を失するものは、すくなしと。聖人の意味は、深長にして格別の事なり。しかれども、先儉約に思ひ付かるゝことこそ殊勝なれ。

六 聖賢の口まね

或學者、某の門弟が専ら儉約を用ゐる事を聞き、或時來りて物語のうへ、問ひていはく、聖人の道はあらそふ事なきを善とする。然るに近比汝はあらそふことを教ふと聞けり。いかなる事ぞや。答へ。某、教ふるは聖賢の口眞似なり。争ふことを教ふるとは、何をもつていはれ候や。

曰く、汝が門弟の中、俄に儉約を用ゐらるゝにより、もして身上のもつれにてもあらんやと、心もとなきいかなる事ぞと問ひしかば、師が好む所なりといへり。學者の上にて約を守るは、常の事なり。しかるを、人にかはり、あはたしく行ふゆゑ、争ひおこる。予が思ふは、世間と一同にするが、善かるべし。既に聖人は、民の心を以つて心とし、民の好む所をこのみ、民の惡む所をにくみ、民と心を一にしたまふゆゑ、民の父母ともいふ。今民のこのむ所は、衣裳に美をつくし、緞子・縮緬・綾・錦・鹿子・緹・箔類、着かざることをよろこべり。其外普請等をきれいに作り、諸道具には、蒔絵・鈔梨子地を用ゐたり。又食物は常々魚類・鳥類おほくつかひ、振舞等には珍味・珍物を取りあつめ、賑にくらすことをよろこぶ。尤もこれらを法にかなふと言ふにはあらず。然れども、斯のごとくなり來りし世上なれば、急々にあらたむることあたはず。聖人の民をなさせ給ふは、親の、子を養育るごとく、漸々を以つて治め給ふべし。一軒の家にていは、妻子より小者に至るまで、吾民なり。其民を次第にやさく治むるが、主人の職分なり。先人間の樂には、衣・食・住の三ツなり。衣類等を拵へるは着てたのしむが爲なり。しかるに自身着ざるのみならず。妻子・小者に至るまで、おさへとめて、着せざるよし。女・童の身にしては、さぞ迷惑におもふべし。是不便の事にあらずや。又振舞も、これまでは、

汁三菜・二汁五菜の料理にて、客をもてなししたるをば、儉約をいひたて、一汁一菜か、一汁二菜の料理ですますとあり。客人も是までとは、されかはりたる不馳走なれば、興なくして、にがしく思ふべし。妻子・家内の者どもは不興なる體を見て、心をいため。さぞ氣の毒に思ふべし。門弟中、人にそむき、俄に儉約をなすゆゑ、したしむべき親類、又家内のものまで、争ひに至るはかなしきにあらずや。是皆欲心よりなす所なり。前に言ふごとく、儉約は、つねのごとく心得るが、學者にあらずや。

七 儉約は常のことなり

答へて曰く、汝の言ふごとく、儉約は學者において、つねのことなり。某、嘗て著す都鄙問答の或人主人行狀の是非を問ふの段にいひ置きしは、始終儉約を行ふ事なれど、それと題號なきゆゑ、門弟も心付なかりしに、儉約が常なる事を得心し、此度改め行へり。それゆゑ、家内のものも珍らしき事と思へるなり。向後身分相應を知れば、儉約がつねとなるなり。又汝人間のたのしみは、衣・食・住の三ツといへり。尤も衣・食・住の三ツを樂めども、今日のごとく、おごりたかぶるを以つて樂みとするにあらざ。此三ツ、人の身によむ事を得ずしていとなむことなり。只飢えず、さむからずして、心やすらかに過すを樂みとす。周禮に曰く室は高きにあらずれども、漏されば便よし。衣服は綾・羅にあらず

ざれども、和暖なれば便よし。飲食は珍しき饌にあらずれども、一度飽けば便よしといふ。又論語にも、君子は食飽かんことを求むる事なく、居安からん事を求むることなしとのたまへり。此味を知るべし。扱妻子や、家内の者にあらずひ、思ふやうにせざるを、不便の事なりといふ。これ大にあやまてり。汝がいふごとく、家内の者は我民なり。我民ゆる眞實に愛するなり。愛する故に争ふことを諭へていはし、吾子に突する如し。逃げまはるをたましとらへて、灸すれば、跳つ、はれつ、反かへり、あゝあつや、最早悪い事しますまい。父様、母様、堪忍してくださいませと泣きさげぶ。親は涙を流し齒をくいしばつて、灸するなり。是もあらずひに似たれども、其子の病を治め、無事に養育んが爲なり。妻子・兄弟に押へ留めてきせざるも、又斯のごとし。國・天下も治まらざる時は、あらずひなくんば有るべからず。既に殷の紂王、不仁を以て、萬民を苦しめ、天下を亂す、周の武王これをなげき、天下を治めん爲に、仁徳を以つてあらずひ給ふ。あらずひは仁と不仁の二ツなれど、遂には不仁を誅し給ふ。こゝにおいて天下に統一統仁に歸す。今世間の奢り者を見るに自美服を着るのみか召つれる女まで、紗綾・綸子に繡箔して着するなり。田舎者は是を見て、御所方か、武家方か、侍のつかねは不審なりと。うたがへり。賤しき町家の者として、かやう成る奢りをなし、道理にそむく罪人となる。

女や子供は智の味きものなれば、結構なるものさへ着れば、善きこと、おもひ、見るを見まねに我しらずして、奢に長じ、貴賤・尊卑の禮をみだる。是をといめん其爲に、止む事を得ず争ふなり。

八 町家の衰へやすきこと

凡べて世の有様を見來るに、町家ほど衰へ安きものはなし。其根源を尋ねれば、愚痴といふ病なり。其愚痴が忽變じて奢となる。愚痴と奢と二なれど、分けがたきを語るべし。或富家の町人、姑・嫁を同道にて参宮す。上下三十人ばかり、ありとわや。小畑の宿にて休み、支配手代は先達つて大夫殿へ案内す。彼思ふは恐らく此大夫にて金持の一旦那は、我親方にて有るべしと、慢心顔にて居たりしが、大夫殿出でられければ、彼手代のいはく、此度後室・奥方兩人共に参宮いたし候。萬事宜しく御世話頼み存ずると、しさいらしく口上述べければ、

九 伊勢の御師手代を戒む

大夫のいはく、其許は當地不案内と見ゆ。京・大阪には町家にて。姑や、嫁を後室の、奥のと稱へられ候や、左様なる上を犯し、奢がましき事は、皇太神宮の邊にては大なる非禮なり。神は非禮を受け給はず。此度参宮せらるゝも、神のめぐみを受けん爲なるに、はるく参宮せられても、神慮に

叶はぬは、笑止成る事なり。大切成る旦那のことゆゑ、斯のごとくいふなり。かたじけなくも茅ぶきの宮作り、三杵米の御供物を受けさせ給ふ。其神慮にかなふ禮法を以つて、参宮案内致すべし。かやうの事をしらずして、今の世には奢りに長じ。分を知らず、仕合よく十間口か廿間口の家を持ち、三十人が五十人も暮せば、大きな事と思ふより、嫁を御新造の、奥の、と稱へさす。都べて農・工・商は下賤なり。其賤者として。歴々の武家方と同じやうに思はるゝこそ、愚なれ。その奢たかぶり、上を犯す心にて、参宮せば、神罰を受けらるべし。是まで知らざるは是非なし。前後は急度懼まるべきとなり。又旦那名よせ帳をみれば、三四十年前迄京・大阪にて、大金持といはれたるかくれなき町人も、往方しれぬ者もあり。又身上衰へて、自炊して暮すもあり。十軒に七八軒は斯のごとし。其時に奥あしらひ誰にしてもらはんや。遠慮なきときは必ず近きうれひありとは、かやうの類なるべし。夫を笑止に思はれて、物語するぞかし。凡べて貴は貴く、賤は賤く町家ならば町家相應の名を呼ばるべし。相應の名を呼ぶが、則ち正直なるゆゑ、皇太神宮もうけさせ給ふ所なりと、竹わゆるやうにいはいはれければ、文盲至極の手代なれど、御師の辭に恥入りて、ほころ勢ひ失せはて、これぞ實に寶勅ならんと感心せりと聞きおけり、其手代忽ちに善に化せられ、愚は變じて智にかへり、奢りは變じて儉と成る。有りが

たき御師の徳ならずや。身は正直の神明に捧げ、且那には心を盡す所より、露塵も詭曲の欲心なく離切りたる警は、大丈夫とも云つべし。總べて物に相應あり。長刀をふらせ、黒縁の乗物にて、内支關より出入ある、歴々ならば、御新造の、奥の、ともいふべし。夫より以下には似合ぬとなり。況んや下賤の者に於てをや。

一〇 名の奢り

古へも名の奢りにて聖人に罪を受けし者あり。楚國の子西これなり。子西は政を糺す賢大夫なり。楚は一國の君なれば、昭侯と稱ふべきを、王號を濫し、昭王と稱へさす。是を以つて他によき事あれど、孔子彼をや。彼をや。と子西が事は論ずるに足らずとのたまふ。世上に名に奢り有ることなしらざるもの多し。都べて分に過ぐるは、皆奢りなり。何ほど奢りかざるとも、農人は農人、町人は町人にて、等の超えらるゝものにあらず。夫をしらざるは、愚痴なり。鸚鵡能く言へども飛鳥を離れず、猩猩能く言へども、禽獸をはなれず。恐るべし。慎むべし。

一一 治世と亂世との比較

或人又曰く、今の世の人聖賢には比べがたし。然れども、汝が口より禽獸と同じく賤むるは、いかなる事ぞや。

答へ。我不肖の身にて、儒を業とす。心あらん人には、賤めらるゝ事多かるべしと、常々恥ぢ恐るゝことなり。然れども、聖賢の道を説く上よりは、自味きとて用捨のならざる所なり。蓋人々己に貴きものあり。教へ導くときは、おのづから聖賢の道にも入り、禮儀をもわきまふべし。辨へざるときは、禽獸に同じ。是を教へんと思はば、先貴賤の分ちと、天下泰平の御高恩を知らしむべし。此有がたき事を告げんとならば、亂世のかなしき事を説きて、治世の安樂なる事を知らすべし。亂世のかなしみに比すれば、百分の一にも足るまじけれど、ちかく世に知る所なれば、大阪、大火の事を語るべし。

一二 大阪大火の時の有様

予先年大和めぐりし、それより大阪へ出しは、三月廿一日午の刻ばかりなり。千日寺の茶店に休みに、堀江邊より出火すといふ。焼出しとは見えながら、すさまじき火なり。折節、未申の風はげしく、いきほひつよく丑寅へ吹付け、黒けぶりの中より爰かしこに火焰みゆ。其勢たとふべきにあらず。此風にてはたまるまじとて、備後町油や何某といふ常宿へ行きみれば、うるたゆる體なり。馴染の事

なれば、見捨てがたく、連のうち兩人は跡に残る。某は荷物を持たせ、八軒屋にて待つべしといひ、別れぬ。八軒やの濱へ往いて見れば、もはや西本願寺御堂に火が、り、大風ゆゑ、外のけぶりさかましく波のごとくなれど、御堂の烟は二三十間ばかりも立ちのぼり、すさまじき勢なり。火におはれ、我先にとにげ走るは、蜘蛛の子ちらすごとくにて、老人や、子供は、負ふたり。懐いたり。手をひいたり。跡を見かへり、泣きもてにぐるものあり。分きて笑止に見えけるは、廿歳あまりのいやしからぬ女、走りつつかれて目をまはし、舟の乗場へつれ行き、水のをませて居るもあり。又三十計の女、紫の小袖着て、男のやうに帯刀し、長刀を持って赤足に草鞋にて、足より血をながし、下女は風呂敷づゝみを買ひ中間と見えしものは、葛籠をかたげたれば、助くるともならずと見ゆ。其外難儀さうなるもの數をしらず。七ツ時迄に、天満も一面の火と成り、難波橋も焼け、天神橋へも火が、りれりと見る所へ、連の者も來れり。二人ともに何なりとも食はねばゆかれぬといへり。さりながら、食と金とつりがへにても賣る人なければ是非なくて、ゆかれ次第往べしと、京橋を渡り、片町にて漸しんこを見あたる。かゝる折ともいはずして、二文のしんこは二文に賣る、げに天下泰平一統に治る御代の徳なれや。そのしんこにたすけられて、足軽く、守口の宿につき、一夜を明すも有りがたき。その時分には、大阪に親し

き者もなかりしゆゑ、未明に立つて歸京せり。後に聞けば、西の御堂にても、數十人焼死す。船場の中も爰かしこへ飛火して、一面に火がまはり、焼きたてられ逃ぐる者は、風に木葉を散らすごとし。財寶は、取次第、落せし物は拾ひ次第、只命を惜むばかりにて、我先へとにげゆく。京橋は人つどひして夥しき人死あり。其外四方八方へにぐるもの、橋の落ちたる所は舟にてわたらんとすれど、舟には諸道具を積置きたり。そのうへ船頭なければ、渡すべき自由もならず。渡らんとすれば、流れて死する者もありと、數の知れざる死人なれば、子が死して、親は残り、親が死して、子は残り、夫が死して妻は残り、妻が死して夫は残り、主人は死して家來は残るも有るべし。又其中には、知音ちかづきなれば、賃借もならず。せんかたなく古郷などへ立ちのき、さぞ難儀なる者も有るべし。斯のごとく、物語すといへども、我見聞く所ばかりなれば、十分の一にもあるまじ。

一三 戰國時代の有様

又戦國の昔物語を聞けば、押入、強盜徘徊し、己が住居も成りがたく、他國へにげんとすれば、道にてはぎとり、財寶所持して逃ぐる事もならず。着のまゝ逃げて、所々にて弓、鐵砲をかまへ、辭をかけ、裸に成りてゆけといふ。着のまゝなり、免せといへど、聞入れず。裸になれば、よし。否と

いは、打ちはずといへり。命に代る衣類はなしとて、裸に成りて往きし者、敷しらずと聞置けり。戦國の時、食物や着物が選み分けておらるべきや。虱だらけの物ならては、着ることは成るまじ。其時木綿・布子は重いなど、理窟がいうておられりか。おしいたゞて着るべきぞ。又食物に乏しく、おほくはつかれるるべし。其時に麥飯や、白粥は嫌なりといふべきや。養ひくる者あらば、神・佛のやうにおもふべし。

一四 性命財産の安全

かたじけなくも今の御代、天下に統一に養はるはありがたき事あらずや。孟子曰く、牛・羊を野飼する地を牧地といふ。人に頼まれ、牛や、羊を牧ふ者あらんに、必ず野飼の地と草とを求めん。其地と草とを求め得れば、牛・羊はおのづから養はるなり。又民を養ふ君を人牧といふ。今天下治る時なれば、各々が職分さへ勤むれば、自から養はるは、牛・羊を野飼の地に放ち置けば、おのづから養はるごとくにて、此苦を知らず。安樂に暮せば、己が力と思へるは愚なること甚し。暖かに着、飽まで喰ひ逸居をして、人の道を知らざるは、禽獸に近きぞと。孟子の戒め給ふなり。今治る時代の、廣大なる御高恩報じ奉る事を思ふべし。下賤の者いかにして、廣大の御高恩を報じ奉るべき。報じ奉る事はな

齊家論 卷の下

一 禮服のこと

或人、又問ふ、汝儒書の講釋に、袴を着せざるも、儉約の含みあるゆゑ、前方よりゆるし置かれしと見えたり。然れども、某思ふ袴は、禮服なり。それを許すは禮をすつると言ふものなり。禮を捨てては聖人の道は脱かれまじ。天下の事、一物として禮にあらざることなし。曲禮に曰く、道徳・仁義禮にあらざればならず。教訓へて俗を正しうするも禮にあらざれば備はらず。争ひを分ち、訟へを辨ふることも、禮にあらざれば決せず。君臣・上下・父子・兄弟も、禮にあらざれば定まらずと見えたり。其辨へを教ふるに、禮を捨てて何を教へられ候や。

二 禮のもの

答へ、曲禮を引かるは、面白きことなり。さりながら、汝のいへるは、表一通りにて、袴を

着れば、禮は調ふと思はるゝと聞ゆ。我言ふ所は左にはあらず。聖人の教を有難く思ふ實あつて、袴を着るは禮なり。實なくして袴を着るばかりは、禮にあらず。子曰ふ繪の事は素より後にす。于夏曰く、禮は後乎。言ふころは禮は必ず忠信を以て質と爲す。是これを以つて見れば、實は本なり、禮は末なり。我許せしは、信心有りても袴着ては、講釋に出てがたき人の爲なり。豈ぞ儉約にかゝるべき。隙暇は有りながら、農・工・商の身として、毎日袴着て徘徊すれば、隣近所の人々がしさいらしく思ふゆゑ、遠慮せねばならぬなり。遠慮のいらぬかたぐに、袴無用といふべきや。

三 教を廣めんことを欲す

兎角一人なりとも多く聞かせたきが我願ひなり。固より人は性善なれば、皆君子の筈なり。然れども聖賢より以下は、私欲あり。私欲ある者は常人なり。其中に甚おぼるゝ者は、悪人ともなる。此故に教へなくんば有るべからず。能く教ふる時は、善人と成り、又甚おぼるゝ者も、刑罰をのがるゝ常人までには成りやすき所なり。是皆性善の徳ならずや。故に孝經・小學などを説き、其意味を知らせ。心を和らげ、上を貴び、下を憐み、家業の事に怠りなきやうに、教へたき志ゆゑ、和らげ説き候まゝ、老若・男女ともに望あらば、無縁のかたぐにても聞がるべしと、又書付を出せり。

四 近世の學問の有様

或學者これを見て、儒書が女の耳へ入るものか。めづらしき書付かなと譏られしと告ぐる人あり。其時某答に、古の紫式部・清少納言・赤染衛門などを、其學者は男と思はれ候やといひければ、告げし人、我言ふ所に同心して、なかしがられき。此様の事をいはるゝも、近世の學問多くは詩作・文章に流れ、聖學の本を失せるゆゑなり。論語學而篇に、行、餘力あるときは、文を學べと、孔子既にのたまへり。文學は末なり。身の行ひは本なり。凡て學問は、本末を知るを肝要とす。又國を治むるには、川を節にして、民を愛すとのたまふ。財寶を用ゐる事儉約にする中に人を愛するの理、備はれり。人を愛せんと欲つすとも、財用たらざれば、能はず。しかれば、家國を治むるには、儉約は本なる事、明なり。これまで、物語すといへども、汝いまだ不得心と見ゆ。幸ひ今般門弟儉約示し合の書付を認め、其序を予に請はれけれど、先何もの存じより述られよといへば、斯のごとしとて、書付見せられけり。趣意、予が心に合ふ。これ約にして見やすかるべし。此序を見て儉約の意味を考へ知らるべし。

五 儉約の序

「伏して惟るに、御代の泰平、目出たく治まる事、上は貴く、下は賤く、尊卑の位まし、有りがたくも、孝を鬼神に致め、飲食・衣服・宮室の類は薄くなし、儉を用ゐたまひ、恵みを萬邦に垂れんと、御力を盡し給ふ、至徳光輝普くあらはれ、すゑの末まで、安穩に照し給はぬ里もなし。實に徒然草にも、世を治むる道は儉約を本とすといへり。

い 儉約の聲

蓋、儉約と言ふ事、世に多く誤り、吝き事と心得たる人あり。左にはあらず。儉約は財寶を節く用ゐ、我分限に應じ、過不及なく、物の費捨つる事をいとひ、時にあたり、法にかなふやうに用ゐる事成るべし。それ、天下安穩に治まり有りがたく、かたじけなき事をあげていはし、財寶は數千里のあなたより、數千里のこなたへ取通はし、舟路・陸路・海賊・山賊の患ひも知らず、近くは開港の區々まで、我家く、に安居して、士・農・工・商おのれくが業に、心をいれるれば、何の不自由なきやうにとの、御仁政、上は申すも恐あり、それくの所々に、司・位にまし、て、日々夜々に怠らず、是を治めたまはり、又家業の隙ある折くは、月花のたのしみも心にまかせ、そのうへ、志あれば、聖人の道を學び、貧富ともに天命なれば、此身このまゝにて足ることの教なき。此國恩の大なる事

天地のごとくにして、中々筆にも盡すまじ。下として無道・放逸をなし、上を犯し、我分限を知らず、身をおごり、人のいたみをしらざるは、悲き事かな。さある人は、天罰のがる事有るまじ。今誠に目覺る心地して、國恩をあふぎ奉り、先非を悔いぬ。これ教を受くる益ならんか。

扱此御高恩い、かんして報じ奉つるべきや。明には知られども、我身をなさめ、上を犯すことなきやうに、慎み、父子・夫婦・親類・縁者、家の小者に至るまで、たがひに睦しく打和らぎ、吝きことなく儉約を守り、一人の小者、又は出入従ふ者をあはれみ、助けたき志なり。これまでも、一家親み又人を悪むこと。元來きらふにはあられども、第一自身のおごりつよく、費おほきゆゑ、人を悪む仁愛の心も、外に成り行きぬ。親しき親類の疎に成るも、かの奢ゆゑ、一家の出會ひも物毎、造作に料理なども、おもくなり、度々の出會もなく、遠々しく成りぬ。これを以つてみれば、奢は不仁の本となり。恐れつゝしむべし。

ろ 奢は不仁のもとし

今より後常の出會ひは、茶漬飯、ひたし物などにて、木綿衣類なれば、おのづから心やすく、度々出會ひ、親き上にもしたしくなり、且親類は言ふに及ばず、宿持手代、出入の人々迄、若身上不知

意なる者あらば、其譯を聞届け不實ならざることならば、何分力を合せ救ふべし。又家内を惠むにも先木綿衣類なれば、あたらしく仕かへるにも心やすく、古き物は、仕着の外に見合せてつかはし、仕着の新しき物は、貯へおかすやうに仕なし、又半季・一季の者は、繰の給銀を取り、布子一重を拵ふれば、残りすくなになり、鼻紙代も不自由にて、甚不便の事なり。たとへ、盆・正月に百・貳百の錢又履などつかはしても、これらにて足るべしとも、思はれず。尤家により、奉公人により、高下次第も有るべけれど、すべて是に准ずべし。夫故たまさかにつとむる者には、折々の心付け致すべき事なり。扱又世間に人をつかふに、定りの仕着や、給銀さへ渡しねれば、事すむやうにおもひ、其外に心を付ける人まれなり。奉公に出る人親もと不自由ならざる人もあれど、多くは、親里まつしきゆゑ奉公にも出す。親もと豊なれば、乳母をも添へ養ひ育つることなり。然れども貧しきゆゑ親の手をばなし、遙々奉公に出すものなれば、さぞかなしく不便に思ふべけれど、是は助けたきとて、いかんかすべき。又たすくれば、助けらるゝ事はたすけたき事なり。總て、田舎出の奉公人は、布子一、かたびら一重あれば、事足りぬと思へり。然れども、半季か、一季過ぐれば、傍輩の衣類多く有るを見て羨しくおもひ、不自由なる親本へいひやれば、親は聞くより不便に思ひ、借金して成りとも、一

つづいもこしらへのぼせ、最早能きかと思へば、又たらぬものをいひやれば、拵ふる事は成りがたくなほさねば、子供が不便なり。いかして成りとも、のぼしたく思ひなやみ煩ふ者多く、いたまじき事なり。かやうの類は心を付け助ければなる事なり。夫故貧しき親・兄弟に其苦勞をさせざるやうにいたしたき志なり。

元來今般の儉約は、上を恐れ、己が賤しきことを知り、約を守り萬分の一なりとも、禮義を守らばおのづから親類はいよいよ睦しく、家内の者には親・兄弟の勞をのがれさせ、出入の人々には、惠みの端ともなり、子としては先祖・父母への孝となり、おのづから上を恐るゝ恭順の道ともなりなんか。

六 世間一同の儉約

或人曰く門人方儉約の序文をみれば、町家相應にては面白し。しかれども、町家ばかりの儉約にて大道の用にたらず。同じくは世間一同に用ゐるやうに、教へらるゝがよかるべしと思へり。汝の門人には、武士方もありと聞けり。此等の教はいかん。

七 身を修むる主

答へ。汝は町家のことは、瑣細にて、大道に用ゐられずと云ふ。某思ふは左にあらず。上より下に至

り。職分は、異なれども、理は一なり。儉約の事を得心し行ふときは、家とのひ、國治り、天下平なり。これ大道にあらずや。儉約をいふは、畢竟身を修め、家をととのへん爲なり。大學に所謂天子より以つて庶人に至るまで、一に是皆身を修むるを以つて本とすと、身を修むるに何んぞ士・農・工・商のかはりあらんや。身を修むる主となるは、如何。これ心なり。此身の微なるを喻へていはば、大倉に稀米一粒あるがごとし。しかれども、天・地・人の三才となるは、唯心のみ。古今たれか此心無らん。然れども是を知る者まれなり。知るといへども、其通を行ふ者甚かたし。惟君子は、誠を存し克く思ひ、克く敬し、天君泰然として、百體令に従ふ。

八 放心

不學者は、見聞くところの欲にひかれ、固有せし仁心を見うしなひ、これを、求むるところを知らず。知らざれば、ことごとく不仁となる。不仁となるものを、放心といふ。尤も色心は愛より來たるといへども、過ぐれば忽ち不仁となる。まづ、放心の二三を擧げていはば、名聞と、利欲と、色欲なり。

九 名聞

衆人はたとひ少々の善事をなせども、己を他より擧められたく思ふ心よりする善事なれば、實の善事にあらず。其外身上の事、氏系圖の事、或は藝能・智恵に至るまで、己相應より宜しく思はれたるき心有るは皆名聞なり。

一〇 利欲

又利欲といふは、道なくして金銀・財寶をふやす事を好むより、心が闇く成つて、金銀有るがうへにも、溜めたく思ひ、種々の謀をなし、世の苦みをかへりみず。剩へ親子・兄弟・親類まで不利に成り、たがひに恨みをふくむに至る。

一一 色欲

又色欲といふは、若き時は前後のわきまへもなく、しなかつたにのみめで。愛かと思へば、かしこにわたり、流の女にさへ心を見すかざるれど、夫をもしらす。親のゆるさぬ金銀をつかふ。又老いたる人も、夫婦諸とも、道にも入るべき時、腰元や、下女に手をかけ、又はわかき女を抱へ、寵愛し、親むべき女房には疎く成り頭には白髪をいたたく事をしらす。榮耀・榮花のおごりのために、こゝろを惱ますことはなはだし。

一 理の會得

其外萬事、不義・無道をなし、心を煩すは皆放心を以つてなり。此味を知らず。仁に心を盡さざるはかなしき事なり。聖賢これを歎き給ひ、學問の道他なし。その放心を求むるのみと。孟子も既に説きたまへり。予教ふる所も、これによれり。孟子開示す所、至つて重きことなれば、容易ごとにあらず。しかれども、修行の功により、放心を求め得ることあり。求むるときは、心の一致なることを知る、故に士・農・工・商の職分異なれども、一理を會得するゆゑ、士の道にいへば、農・工・商に通ひ、農・工・商の道にいへば、士に通ふ。なんぞ、四民の儉約を別々に説くべきや。儉約をいふは、他の儀にあらず。生れながらの正直にかへしたき爲なり。天より生民を降すなれば、萬民はことごとく天の子なり。故に人は一箇の小天地なり。小天地ゆゑ、本私欲なきものなり。このゆゑに、我物は我物。人の物は人の物。貸したる物はうけとり、借りたる物は返し、毛すぢほども、私なくありべかりにするは、正直なる所なり。此正直行はるれば、世間一同に和合し、四海の中皆兄弟のごとし。我願ふ所は人々をこゝに至らしめんためなり。分けて士は政のたすけをなし、農・工・商の頭なれば、清潔にして正直なるべし。もし、私欲あらば、其所は常闇なり。又農・工・商も家の主は

家内の頭なり。もし私欲あらば、家内が常闇となる。すべて物の頭となるものは、つゝしむべきことなり。然るに欲心に蔽れ、此正直を行はずして、あさましき交りになり行くは、かなしきことなり。故に十五年以來、其私欲を離るゝ事を説き來れり。私欲ほど世に害をなすものはあらず。此味を知らずしてなす儉約は、皆害に至り、害をなすこと甚し。我いふ所は、正直よりなす儉約なれば、人を助くるに至る。子曰く人の生けるは直なり。罔て生けるは幸にして、免れたりとのたまへり。これを以つてみれば、不直にして生けるといへども、死人に同じ。恐るべき事なり。

一三 關東洪水のときの話

それにつき去春或人關東洪水の事によつて、問はれし事あり。予返答せし趣物語すべし。或人の問ひにいはく、何も方は際の拂も例年の通首尾よく仕舞ひ、正月を祝はる。某も人に遇へば、先もつて御慶といへば、先方よりも御無事に重年目出たしといふ。しかれども、我心、苦しければ、一切目出たうなし。所以は去年關東の洪水に、我藏のごとくに思ひし三軒の得意は、家財より田島まで流され、身がらほうほう命を助かれしばかりなり。依つて、當分の見舞ひに金三十兩あまりつかはしければ、やうくと飢は助かりぬるなり。然れども賣場もことごとく流れたれば、申々商ひの段

にてはなく、これまでの賣掛を取りあつめのぼさるゝは、今年共來年とも其限りは知りがたし。此仕合ゆゑに、際拂もならず。借金を濟さんとすれば、家財まで賣拂ひ、赤裸に成るなれば、是も又成りがたきことなり。日比汝の物語を聞くに、難儀の所にて心を惱まぬが學問のちからなりといへり。かゝる時いかんして、心をなやまさず御慶目出たく祝はるべきや。

一四 正直を守る

答。某いふ通り、そむかず用ゐらるゝならば、いと心やすきことなり。望の通り萬々歳を祝ふべし。祝ふといふは、他の儀にあらず。正直を守ることなり。正直を守らんと思は、先名聞・利欲を離るべし。然れども柔弱にてははなれがたく、名利のこゝろは發るべし、發るとも、一生行はされば、扱も正直者なりと、天下の人よるこぶべし。天下の人に悦ばるゝほど、目出たきことあるまじと思へり。いかん。或人曰く正直者といはるゝは、誰も望むところなり。しかれども、借方を濟す事はいかんすべき。答へ。汝世間の者によるこぼるゝは、誰も望む所といふ。喜ばるゝが望みならば、家財残らず賣拂ひ赤裸になり、借金を濟さるべし。ことごとく濟されなば、今の世にたぐひ稀なる正直ものと、世擧つてよるこぶべし。其正直と又神の正直と、正直に二品あるべきや。其正直が通るな

らば、汝も直に大神宮の末社同前なり。既に比咩大明神の御託宣に、

天にならひ地にうけたりし人心、まがらざりせばすなはちの神

とあり。此意味を得心せば、身上有ツ切賣拂ひ、借金皆濟せらるべし。其とき負せ方の心を推していは、誰もかくさつぱりと裸には成り難き事なるに、扱正直なる仕つた哉と、汝が心を感じずべし。譬へていは、人の生れし時は裸なり。然れども、裸で凍えし赤子もなし。無智・無欲成るものなれど、先産着とて、着せるなり。親が着するのみならず。親類まで持寄り着せるなり。人の心は自然に慈悲・正直なるところあれば、汝の裸になられし其日より、感心せし負せ方が、寄集りて着すべし。左はいへど、何程の財寶が集まるべしとは知りがたし。正直より集まる財寶なれば、神に捧ぐる散錢の如し。

一五 かたりぬすびと

しかるに、世間に此貴まるゝ事を嫌ひ、私欲をもつて邪知者を頼み、相談せば、何程の借金有りとも、二三步通よりあつかひかけ、辯舌を以つていひまはさば、四五歩どほりにては濟むべし。少し成りともおほく残すを、手がらとし、其の残る金銀を我物と思ひ、人をだます事を所作とするは、俗にいふ話、盗人といふ者なり。謀計は、眼前の利潤たりといへども、必神明の罰に當る。正直は一

且の依怙えこにあらずといへども、終つひに日月の憐あはれみを蒙かうむるとは、皇太神宮の寶勅ほうちよくなり。神の罪人つみびととならば、居所きよ所はあるまじ。廣ひろき世界に住得すみえずして、狹せまき住居するはかなしき事なり。ひろき世界に住得ずして、せまき住居するといふは、土地のことにてはなし。廣大なる心を微塵みぢんのごとくなしてくるしむことを云ふ。又正直しやうぢきを行ひ心に恥はぢることなければ、限りなき天下の廣居かきに居て深長しんちやうなるたのみあることなり。我教わがふる所は、其話かたり、盗人ぬすびとの難なんを遁のがれさせ、正直者しやうぢきといはれ、鏡かみのごとき明神の御心みこころにかなふやうにならるゝは、目出めでたき祝いはひにあらずやと云ふ。

或人又曰く、汝ないふ所の儉約けんやくは、正直が本なる事をいひ、且常にも正直を第一に教へらるゝにつき、或人に答へられし物語ものがたり一通り聞えたり。汝所存あかの通赤あかはだか裸なだかとなつても、正直を用ゐる志に候や。しかれば、論語ろんごに、葉公、孔子に謂つて曰く、吾黨わがに躬みを直なほくする者あり。其父羊ひつじを掠ぬすむ。然るを子これを證あかしすとあり、父が惡事あくじにても隠かくさず、あらはすはありべかりの正直なり。又前まへにかるゝ御神託ごしんたくに、天あまにならひ地にうけたりし人心こころ、まがらざりせばすなはちの神かみ。

とあり。天地は見えし通り明らかにして、隠かくす所なし。汝がいふ所もかくす事なく、ありべかりの正直なれば、御神託ごしんたくに同おなうして、眞直まっすやなり。然れば汝がいふ所は、神道しんたうの上の事なるべし。某思あふは

左にあらず。總くわて世間せけんの事汝がいふごとくさばつりと裸はだかには、成りがたき所あり。故に孔子も葉公わがにこたへて曰く吾黨わがの直なほき者はこれに異なり。父は子の爲ために隠かくし、子は父の爲ために隠かくす。直なほき事其中そのうちにありとのたまへり。汝も我も同じく儒書じゆしよを學まなび、かやうに相違さうゐあるはいかん。

一六 思慮と實情

答こたへ。此御歌このみかは、人々、天地に受けたる心を直ちやに用ゐるときは、即神すなはなることをしらせ給ふところなり。汝は父が惡事あくじを證あかしす惡人あくにんを、反さかつて正直者しやうぢきと思ひ、御神託ごしんたくと同おなじやうに見なすは、理ことわりに聞きゆる是非ぜひわかれず。彼が不善ふぜんを知らんと思はば、實情じつじやうを知るべし。實情じつじやうの發はる處ところはいは、こゝに人あらんに、その父人を殺ころさば、はつと驚おどろくは子の常つねなり。又父が羊ひつじを掠ぬすむと聞くとときも、はつと驚おどろく情じやう發はるは、鏡かみに物の移うつり、形かたちに影かげのそふがごとく、間に髪かみを入れず。此所このところにて、豈なんぞ直ちやう・不直ふちやうを論ろんぜんや。これ惻隱そくいんの情じやうにて、實情じつじやうなり。常人たうじんは勝手かたてにひかれ、思慮しりよおほく、其意そのいに思ふは、此事人このことが知るべきか。定さだめて知るべし。隠かくし課かすることはなるまじ、迎むかへも隠かくくされぬことならば、人にいはれぬ前に我われよりいふが罪つみもかるくて、然るべしと思ひ、父の惡事あくじをあらはすは、己れを思ふ所より、父を捨すつるに至る、不孝ふこうものにて、大惡人たいあくにんなり。汝博學はくがくなれども、理ことわりに聞きゆる、思慮しりよと實情じつじやう分わちがたく、周

より、論語ろんごが解とけぬ所ところより、神道しんたう・儒道じゆたうに高下かうげを見なすは、笑止せうしなることなり。既に孟子まつしに云ふ。上世うせ嘗て其親そのおやを葬はうむらざることあり。其親死する時、擧あげてこれを谿たにに委すつ。他の日これを過あぐる時、狐きつね狸たぬきこれを喰くひ、蝮はひあぶ・蝸かたがひ姑ここれを喰くふ。子こが額ひたいより、汗流あせながれながしめ、睨にらみみに見て視みず。それに汗あせすること人の爲ために汗あせするにあらず。中心こころより面目おもてに達いたすと。是即すなはち惻隱そくいんの心こころなり。

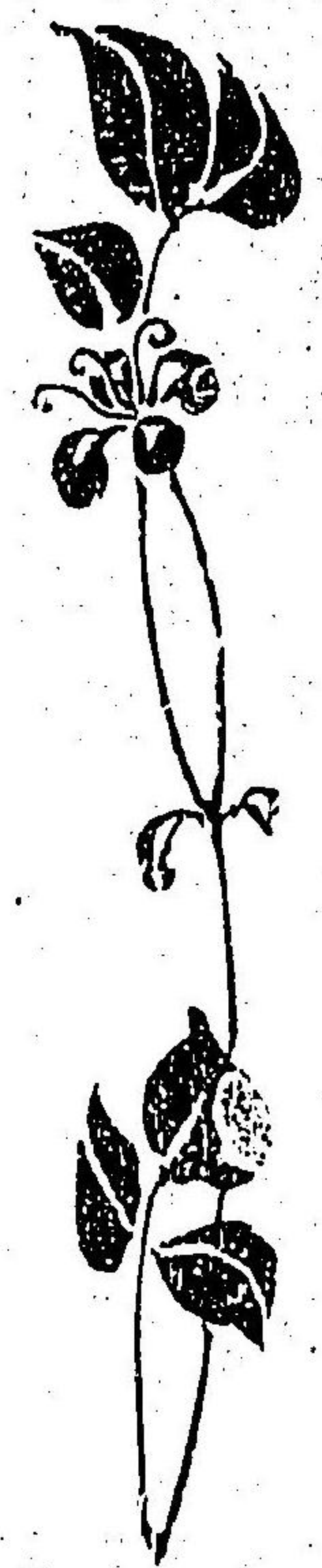
一七 正直の解

予は此この惻隱そくいんの心こころ發たる所ところを直ただに行おこなふを正直すうじきといふ。舜しゆんの大聖人たいせいじんといへども、瞽瞍こそう、人を殺ころせば、善惡ぜんあくをえらまず、負おひてのがれて、隠かくれ給たまふべしと、孟子まつしものたまふところなり。聖賢せいけんの説せつきたまふ惻隱そくいんの情なさけは、直ただに眞心しんこころなり。思おもひて得えるにあらず。勉つとめて申まるにあらず。天理てんりの自然じぜんなり。程子ていしの所謂すゐい、聖人せいじんの心こころは明鏡みやうきやう止水せいすいのごとく、四方八方しやうはうを照てし給たまふ。又神道かみちにて八咫鏡やたのかみと申まし奉ほうるは、直ただに天照てんせう大神たいじん宮みやうの御心みこころにて、天あまが下したあらんかぎりを、照てさせたまふ、神聖しんせいの御心みこころかくのごとし。一塵いちじんもといへぬ御心みこころにて、乾坤けんこんを貫つらぬぬきたまふ。これ明あきなりといはんや。直ただなりといはんや。又正たださといはんや。年月としづきを重かさねためて黙もくして識しべきところなり。

予云まをふ儉約けんやくは、只衣服ただいふく・財器さいきの事ことのみにあらず。總すべて私曲しきよくなく心を正ただしうするやうに教おしへたき志こころなり。

り。退ひいて工夫くふう有あるべし。尤なほも言まをふ所ところは質朴しつぱくにして野鄙やひならん。しかれども、文質ぶんしつ相あかぬることは、大賢たいけん以上いじやうのごとにて、天あまに階はして昇あるがごとしといふも中々なかなか愚おろかりなり。

(延享元年九月京都にて刊行)



明治四十五年一月三十日印刷
明治四十五年二月廿三日發行

學生文庫第貳拾六編

不許
複製

新訂續心學道話
定價金參拾錢

校訂者 大町 桂 月

發行者 東京市日本橋區本石町三丁目十四番地
加 島 虎 吉

印刷者 東京市芝區愛宕町二丁目十四番地
金 崎 金 平

發兌

東京市日本橋區
本石町三丁目
東京市日本橋區
住吉町二番地

電話本局三六六番二六七番
退替貯金口座東京一七四四番
電話預托 五八四九番
退替口座東京一九八四二番

至誠堂書店

至誠堂小賣部

大町桂月先生訂校題

(逐次刊行)

學 生 文 庫

(全五十卷)

本美類 錢拾參金冊各價定 製特珍袖

卓 解
拔 題

——{目書刊既}——

至 選
善 譯

何人も一本を藏すべき
先哲名著の一大寶庫

30 源平盛衰記參編	29 常山紀談下編	28 四書全	27 禪學名著集全	26 續心學道話全	25 日本外史下編	54 大岡政談上編	28 太閤記壹編	22 狂言記全	21 百人一首一夕話全
源平盛衰記四編	大岡政談下編	太閤記貳編	謠曲全集下編	川柳名句集全	文章軌範全	名人落語集全	武士道名著集全	近刊書目	

周到卓拔なる批評的解題は
各書の性質網要價值を詳説す

至 携
便 帶

は節の文注御め纏取上に部五
候仕可に引割一に特

至 價
廉 格

大町桂月先生訂校題

(逐次刊行)

學 生 文 庫

(全五十卷)

本美類 錢拾參金冊各價定 製特珍袖

豐 內
富 容

——{目書刊既}——

嚴 校
密 訂

學生及讀書家一般の讀物として史傳、修養、
教訓、文藝、隨筆等の古典的名著を網羅す

10 常山紀談上編	9 心學道話全	8 太平記壹編	7 源平盛衰記壹編	6 西遊記上編	5 曾我物語全	4 謠曲全集上編	3 益軒十訓上編	2 日本外史上編	1 南朝史傳全
20 西遊記下編	19 謠曲全集下編	18 源平盛衰記貳編	17 益軒十訓下編	16 常山紀談中編	15 一休諸國物語全	14 義經記全	13 先哲叢談全	12 益軒十訓中編	11 日本外史中編

大町桂月先生自ら全卷を選擇し
解題し校訂して多趣多益也

鮮 印
明 刷

品與賞良最の校學各

優 裝
良 幀

編一第書叢文漢譯新

大町桂月先生譯評

新譯 日本外史

全貳拾貳卷縮刷全壹冊 紙數壹千貳百頁

袖珍特製美本 特價金壹圓貳拾錢
定價金壹圓五拾錢 小包料金八錢

本書は近世の偉人絶代の文豪頼山陽が一生の心血の凝る所識見卓抜筆力雄麗古英雄一々紙表に生動し千戈の聲恍として机上に起る成敗の跡火を見るが如く大義爲めに明らかにか天下の士氣爲めに振ふ實に東西無類の散文敘事詩なり現代の文豪大町桂月先生拮据三年之を今の文に移し文部省所定の假名遣に依り小學兒童にも容易に讀むを得せしむ嗚呼外史は斯く永遠に復すべし難解の字には解釋を附し治亂興亡の因る所を尋ねて奇抜痛快の批評を加ふることを數百條山陽が當時を擲りて言ひ得ざりしことまでも遺憾なく顯はされて桂月先生獨得の妙を極む殊に奇一讀人をじて血躍り胸鳴らしむ以て歴史を知るべく以て士氣を勵ますべく以て文學を味ふべし天下有爲の士此書を閉却して自ら賣を捨つる勿れ

友田宜剛先生評解

全七卷縮刷全壹冊 紙數壹千壹百頁

新譯 文章軌範

袖珍總クローズ 正價金壹圓拾錢
天金箱入特製 小包料金八錢

文章は經國の大業の五號活字を用ふ更に平易の口語文に通解し別に又語釋を施し文不朽の盛事本書は最も初學者の通じ易きものにして從來漢文の研究書たり文章軌範精神修養作文練磨は見地を具せる人斯人にして斯書あるは世人の期待に負かずと漢文獨學の大寶典

編三第書叢文漢譯新

濱野三郎先生註解

新譯 孟子附索引

全四十卷縮刷全壹冊 紙數貳百八拾頁 稅郵 錢拾九金價正

文章は奔放自由を極め英氣の潑瀾たる比喻の巧に豊富 實に不朽の天品世界の文學書内容亦實に豐富 孟の全文を和譯して之に註解を附し上欄には五十音に基く索引を添へ書中の一語を知るときは直に其全文を求め得るの便に供したり其の和譯の正當なる註釋の穩健にして平易なる世に貢獻する所少なからざるべく殊に孟子の書は其議論の奇抜なる其文章の雄健簡潔なる支那文學中推して第一の位に置くべきもの青年子弟の讀物として最も現代に適切

編四第書叢文漢譯新

大町桂月先生譯評

新譯 日本樂府

袖珍總クローズ 正價金五拾錢
天金箱入特製 郵稅金六錢

山陽獨得の歴史詩尊王の愛國の精神活躍す!

當代に異彩を放てる大町桂月先生嚮きに日本外史を爲され今たま頼山陽の筆明快を極めて渾然として古今に獨歩せる頼翁の氣魄と筆致とを照動せしむ詩人として古く以て士氣を鼓舞すべし日本男兒之を讀まば必ず案を拍つて起らん

新編漢文叢書第五編

史界の一大奇觀

頼山陽前に日本外史著して武門の興廢を説き、後に日本政記著して朝廷施政の...

大町桂月先生譯評 新編 日本政記

袖珍天金 箱入特製 定價八拾錢 郵税金八錢

久保天隨先生譯評

新編 十八史略

支那五千年興亡八十餘朝此間治亂成敗の跡漢滿民族の起伏消長を審にせる者を十八史略と...

袖珍總クロース 天金箱入美本 正價金八拾錢 郵税金八錢

新編漢文叢書第七編

友田宜剛先生譯評 新編 續文章軌範

新編 續文章軌範

長特の書本

漢文讀方通解たる文法の誤りに深く注意し本文は新式ゴシック活字振假名附にして難解の字に...

袖珍總クロース 天金箱入美本 正價金壹圓 郵税金八錢

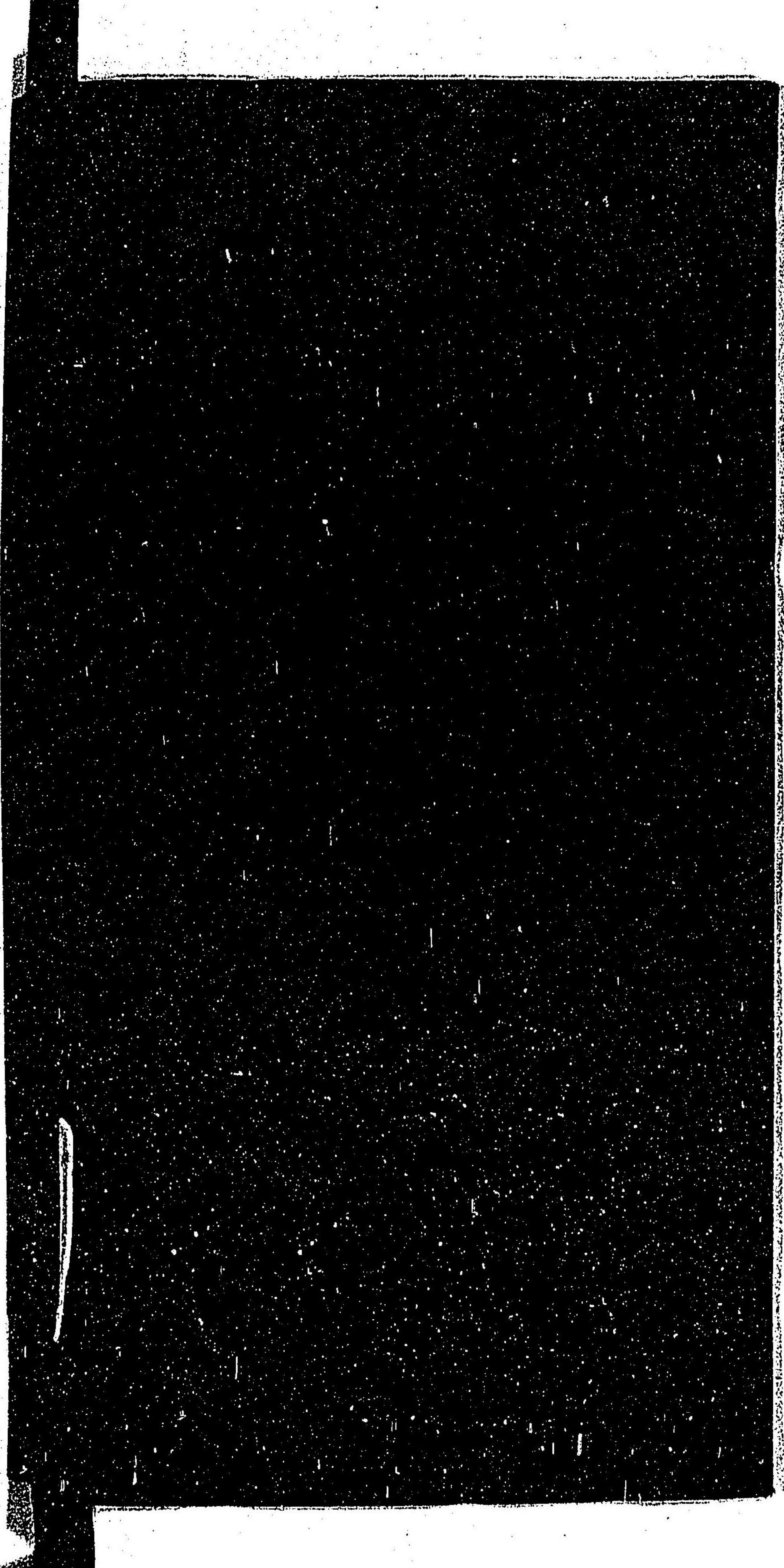
新編漢文叢書第八編

大町桂月先生譯評

新編 國史略

全五冊 袖珍特製 紙製圓壹金 郵金八錢

萬世一系の天皇を戴ける神州に生れながら神州の貴き所以を知らず三千年の金甌無缺の歴史を骨組のみありて肉なく血なしの歴史を...



266
750

特
6